

二次元ドリームノベルズ

18
未 満



サンダークラップス! リボーン

THUNDER CLAPSI REBORN マイティナース

羽沢向一
挿絵：緑木邑

Contents

第一章
マイティナース
誕生 004

第二章
はじめての
ヴィランとの闘い 028

第三章
黄金に輝く
処女陵辱 047

第四章
古き蛇の毒く
淫魔術 090

第五章
ヒーローたちよ、
イキ狂って
産卵せよ！ 120

エピソード1
真相 171

エピソード2
真相 178



スターサンダー

Star thunder

「サンダークラッパス」のリーダー。
端正で気品のある大人の美女。
地球人の母と宇宙人の父を持つ混血の
ミュータント。
電気を自在に操る能力を持つ。

ローズデバイス

Rose device

「サンダークラッパス」の一員。清楚可憐で
色白な美少女。
亡父の実験中の事故により、幼いころに重傷
を負い、体内にナノマシンを入れている。
様々な機能を持つアーマーを装着して闘う。



オセロット

Ocelot

「サンダークラッパス」の一員。猫科
の猛獣の雰囲気を持つ陽気な美女。
南米の自然の精霊たちと認められ
シャーマンで、精霊の力を宿してジャ
ガーの獣人に変身して魔法を使う。



マイティナース

Mighty nurse

清楚な雰囲気の子大生。近しい人々以外に
は自らがオフビートであることは隠している。
スーパーヒーローになるつもりもなかった
が、能力を使って人助けをしたことをきっかけ
に「マイティナース」として活動始める。



フレア

Flare

スーパーヒーローチーム
「サンダークラッパス」の一員。
凛とした力強い美女。
悪の科学者ドクター・ディスオー
ダーに創られ本人造人間。
頑強な肉体と怪力を持つ。



Attention

レプティルホール

Reptilehole

爬虫類をモチーフとする
犯罪組織。

サンダークラッパス! リターン
CHARACTERS マイティナース









目次

第一章	マイティナース誕生
第二章	はじめてのバィランとの戦い
第三章	黄金に輝く処女陵墓
第四章	古き蛇の舞／泥魔術
第五章	ヒーローたち、イキ狂って魔物せよ！
エピローグ一	真相
エピローグ二	真実

第一章 マイティナース誕生

オフビート。

それは世界中にいる超人たちの総称。

かつてソビエト連邦が存在した冷戦時代のはじめに、テロリストがワシントンD.C.へ向けて放った核ミサイルを、ひとりの男が生身で受け止め、生身を宇宙まで運んで捨てた。大勢の人々を救ったその男は、宇宙からもつてくるべく、集まった記者たちへほかに笑って、僕は子供のころから『超能力者』と呼ばれていた、と語った。

それからスーパーオフビートは鮮やかな赤いコスチュームをまとい、赤いクープをひるがえして、倒れかかったビルを持ち上げ、墜落する飛行機を支え、海底に沈んだ潜水艇を引き上げた。

さらに多数の犯罪者と闘い、ギャングが放った銃弾の雨も砲弾も銅板で跳ね返し、テロリストが仕掛けた爆火にも冷静にも耐えて、悪党を逮捕して法の裁きのもとへ送った。

最初に世に現れた超人スーパーオフビートに刺激されたのか、それまで知られていなかった超人たちが次々と姿を見せた。

彼らは生まれつきの超能力者、改造人間、魔法使い、あるいは意志を持つロボット、伝説の妖怪や魔物。はては悪魔人間に別次元人までいた。人々は最初の超人にちなんで、彼らをオフビートと呼んだ。

オフビートたちの多くの者が、特別な能力を大小様々な犯罪に悪用した。

別のオフビートたちは、始祖スーパーオフビートにならって、犯罪と闘い、事故から人々を助け、天災から人々を救うスーパーヒーローとして活躍している。

しかし大多数のオフビートたちは、豪華や近しい人々だけに自分の超能力を明かして、ごく普通の人間として生活している。

今度流奈もそういう平凡なオフビートのひとりだった。

流奈はマンシヨンの自室の壁にある鏡に、自分の全身を映した。

十八歳、大学二年生、身長は一六七センチ。

色白の肌に浮かぶ顔は、どこか昭和の美人女優が演じるお嬢様という雰囲気だ。

背中に流れる長いストレートの黒髪も、やはりいまだきではない。

長方形の鏡に映る長身は、純白のナースの制服を着ている。本物の制服ではなく、バーティグッズショップのネット通販で買った

コスプレ衣装で、実際にはありえない膝上のミニスカートだ。

白衣の胸を押し上げるバストはDカップ。背が高く、手足がすらりとした長いので、華奢な印象だが、半袖のミニスカートから伸びる腕

も細も女らしいまろやかさがある。

頭には、今ではほとんど使用されなくなった白いナースキャップが載っている。

両足にはあるしたてのかわいいうい白いパンプス。本物のナースはもつと仕事用の靴を履いているが、仮装だから気にしない。

流奈は両手の指で膝上のスカートの裾をつまんで、首をかけた。

「ねえ、やっぱりスカートが短すぎないかなあ？」

流奈の問いに代えて、鏡にもうひとりのミニナースコソレが現れた。流奈とは対照的に小柄で丸顔のナースは高橋佳衣。流奈

の幼なじみで、今も同じマンシヨンに住み、同じ大学に通っている。

「このミニスカがいんじゃない。ハロウィンの仮装なんだから。それに下はショーツじゃなくて短パンなんだし」

流奈の白衣のスカートが、佳衣の両手に握られた。

「ひゃー」

とつさにスカートを押さえようとしたが、佳衣のほうが素早い。スカートが轟々とまくり上げられて、中の下半身を全開にされてしま

った。

現れたのは、スポーツ用のショートパンツ。こんな洗手なスカートまくりを外でされたら大騒ぎするところだが、同じ仮装の親友と

二人きりなので、鏡に映るあれもない自分の姿をじつくりとながめることにする。

「うーん、まあ、このミニスカートもありかな」

「でしよ、今年のハロウィンこそ、渋谷のスクランブル交差点にくりだすぞ」
死の輪舞舞二人組が東京もんにぶちくわしたるけ

ん、覚悟するのベッキー」

「それ、どこの方言なの？」

「大都会に慣れる地方都市井たべつちや」

「あはは」

流奈と佳衣が住んでいるのは、東京や京都から離れた日本の中央の奥、奥所所在地である農本市内のマンシヨンだ。

今日は流奈の部屋で、ハロウィンに渋谷へ行くために着る衣装を作っている。といつても今はまだ八月二十日。本番の十月末には一

か月以上あるが、それまでにしっかりと仮装の調整をする計画だ。

二人は並んでミニナース姿でいろいろポーズを取り、自分と相手を見比べた。

「そうだ、流奈、この針金を切って」

いろいろな道具や材料がごちゃごちゃと置かれたテーブルの上から、佳衣が太い針金をつかみ取って、流奈へ差し出した。針金の先

端から三センチほど、赤いサインペンで印がつけてある。

「フム、マジか？」

「OK」

流奈は針金を受け取る。顔の前に近づけた。

針金が顔から十センチほどの位置に来ると、口を小さく開いた。

とくくに舌を集中しないで、すつつと舌を吸った。

口の前に、小さな赤い炎が現れる。太い銅線に付くくらいサイズの炎だ。

口の中から炎を噴き出しているのではない。口を開けて、火をイメージする。口の前に炎が出現するのだ。流奈本人にも確認はわ

からないが、ものごとがついたときには自分ほそれができるとわかっていて、生まれつきのオフビート能力だ。自分はいわゆるニ

ータントだと思えてい

炎は自由に燃えることができる。思うがままに炎の色を赤から青へ変えて、強く燃かせた。形も楕円形から細くながらせて、長さも十五センチの刃と化す。

青い炎の刃を針金に触れさせると、映画で見るレーザーのよう針金があざりと切断された。そつて次々と針金を同じ長さで切り落としていく。

流奈は口を開いた。スイッチを切ったように、ひとりでに炎が消える。

焼き切った針金の先端を指でつまむと、思った通り熱くない。金属本来の冷たさを感じる。これもまた理屈はわからないが、流奈の炎に燃やされたり、溶かされたり、焼き切られたものには熱が残らない。わかっていても他人に渡す前には、念のために自分で温度を確認している。

流奈と佳衣は針金をペンチで曲げて、アクセサリを作っていく。

「いつ見ても便利よね。流奈の炎は」

「父さんと母さんと佳衣以外の人間では使えないんだから、使い道がないよ。せいぜい自分の部屋でマツチの代わりに使うだけね。このマンションはキッチンがオール電化だから、料理にも使わないし」

「もったいないなあ。流奈はスーパーヒーローになりたいと思わない？ 東京へ行けば、ヒーローの誰かに会えるかもよ」

「わたしにヒーローなんて無理よ」

「流奈は口の火だけじゃなくて、身体も通すで、力も強いのに、いつも普通のふりをしているでしょ。たまには腕力を思いっきりふるってみたいと思わない？」

「ぜんぜん。わたしはきちんと大学を卒業して、できれば日本文学に関わる仕事に就きたいの」

流奈たちが作業しているリビングルームには、壁に沿って本棚がいくつもあり、日本の古典から現代まで文学書と研究書が整列している。ある意味女子大生とは思えない部屋だ。

「わたしはなりたくてオフェートになったわけじゃないもの。たまたま力を持って生まれたミュージタントだからって、それで人生決められたくない」

「わかったわかった。じゃあ部屋にチャレンジね。流奈、戻ったまま、じっとしていろ」

佳衣がテーブルに置いた白い包帯を持って、床に横座りする流奈の前にまわった。

「ナースの校母さん直伝の包帯さばきを、ついに習得するときが来た。さあ、ご冥に入れよ」

アニメのキャラクターみたいな声を出して、佳衣の両手が流奈の顔に包帯を巻いていく。自分の言葉通り、プロ並みの手際で親友の顔全体にきつちりと包帯を巻いていく。

「口から火を出すより、こういう技を欲しかったな」

「そうかなあ。ほい、完成。さあ、どうすよ」

佳衣に引っぱられて、流奈は再び壁見へ向けられた。鏡に映る自分は、長い髪を外に出したままで、顔をすべて包帯に隠されている。ただ左の眼だけが包帯の隙間から覗く。

「すごい！ 本当に包帯を巻くのが上手いのね。ああ、わねなら不気味」

「ハロウィンにぴったりでしょ。これで包帯に血痕をにませてあげば完璧ね」

そのとき、流奈と佳衣の股間を露骨に叩いた。

窓の外から、連続してなにかが壊れる音と悲鳴が聞こえてくる。

「なに!!!」

「事故!!!」

二人並んで窓から身を乗り出す。流奈の部屋は三階で、窓の下には道路と歩道がある。道路を挟んでマンションの向かい側の歩道に、大きな看板が落ちていた。向かいの十階建てのビルの屋上に設置されているはずの、市内にある大手不動産屋の看板だ。たまに目に入ったときは、さして大きいとは思わなかったが、歩道にあると重荷を使わなければ動かせないサイズだとわかる。

その大看板に、女が下敷きになっていた。看板の裏側を支える鉄骨の一本が、女の右足の太腿に刺さっている。今のところ命の危険はないようだが、ショックで目を大きく見開いたまま、マネキンのように硬直しているが、重傷のせいだろうかともない。

数人の男が看板のあちこちに手をかけて、太腿の上から持ち上げようとしているが、重傷のせいだろうかともない。

流奈は今まで、人の身に危険がおよぶ事故現場に直面した経験がなかった。しかしニュースで事件事故を見るたびに、自分ならどうしていただろう、と想像した。自分が秘密にしているオフェートの能力を人々に明かしても救助できるだろうか、と何度も考えてきた。

現実に救助を必要としている人を目の当たりにしたときに、気がつく二階の窓から飛び出していた。子供のころからの経験で、自分の身体はこのくらいの高さなら平気で降り立てるようになっていた。

幸いにも道路の人々の視線は看板の下の方に集中していて、流奈がどこから現れたのかは誰にも気づかなかった。ただ顔を白い包帯でぐるぐる巻きにしたミスカ白衣のナースが、いきなり背後から人々を押しのけて進み出たことに仰天している。

「すみません、どいてください。わたしはオフェートです。わたしが助けます」

生まれてはじめて知らない人たちの前でオフェートと名乗りながら、流奈は看板の下敷きになっている女の前に膝をついた。鉄骨の状況を判断して、包帯の内側で口を開き、布越しに空気を吸った。

「できる！ わたしはできる！ 重傷に炎を操って、この女の人を助けられる！」

佳衣には使い道がないと思っただが、流奈は炎をコントロールする練習をずっとつづけてきた。今まで炎を人や動物に向けたことはないが、自分の能力が簡単に生き物を殺傷できることがわかっていて、だからこれを完全に制御する責任がある。

「助けるっ！」

口の前の包帯を燃やして、赤い炎が延びた。炎は色を青白に変えながら、細いロープのようになくなっていく。周囲の人々から驚愕の声が上がった。

太腿を押すつまず鉄骨を両手で握ると、炎の刃を慎重かつ速く動かして、太腿の左右の二か所の鉄骨に触れさせる。熱したナイフでバタを切るように、鋼鉄が切断された。予想した通り鉄骨を切り離して、他の鉄骨が看板を支えている。

男たちが女の身体を引っばって、右足を看板の下から抜いた。

その直後、上からコンクリートの大きな塊が落下して、看板に衝突した。ハッとして見ると、看板が設置されていたビルの屋上から、一台の乗用車の白い車体がコンクリートの壁を突き破ってはみ出している。屋上の駐車場が暴走して、看板に衝突したらしい。

「手が！」

運転席の窓から、腕が力なく垂れ下がっている。運転手は意識がないようだ。

（あの人も助けないと、ああっ！）

乗用車がカクンと揺れて、さらに前へ出て続いた。流奈の周囲から悲鳴がいくつも上がり、危険を感じた人々が走って逃げていく。流奈の目にも、今にも目蓋が落ちてくっつく。

（すぐ屋上へ行かないと、間に合わないっ！）

強く勝った直後、流奈は自分の身体が空中にあることに気づいた。視界が一気に下へ向かって流れ、目の前に白い乗用車がある。

「な、なに!!」

反射的に顔を背後へ向けると、自分の背後の空が揺らいでいる。白衣の背中から左右に陣炎が広がっていた。

「飛んでる!! わたし、空に浮いてる!! これわたし、の能力なの? あああ、そんなことを考えても場合じゃない!!」

両手を前に出し、パンパーを下からすくい上げるようにつかんだ。車体の重みが両腕にかかる。この重さははじめての体験ではない。高校生のときに自分の腕力を確かめたくて、父の軽トラックを持ち上げたことがあった。

佳衣が言ったように、流奈は普通の人間よりも力が強い。普段は隠して筋力を常識的な女の子並みに抑えているのではなく、必要に応じて筋力を強くできるという感覚だった。父親から『ギアを上げたみたいだ』と言われたので、自分でも『身体のギアを上げる』と表現している。

自動車を屋上へ押しもすくことをイメージすると、空中に浮かぶ身体が前へ移動する。そのまま車体を完全に屋上へ上げて、安全な中央部まで押して移動させた。

運転席を見ると、中年男がハンドルにつぶぶして、ビクリとも動かない。ドアの外に出ている右腕の腕を取ると、幸いにも生きている。胸をなでおろしていると、バトカーと救急車のサイレンが聞こえた。すぐに屋上の鉄扉が開いて、救急隊員と制服の警察官がわらわらと姿を現す。

救命士が乗用車のドアを開けて、運転手を担架に横たわらせる。

警察官が流奈に近づいてきて質問した。

「はじめて見るが、あなたはいわゆるスーパーヒーローなのか、名前は」

「すみません、失礼します!」

流奈はすった声をほとぼしらせて、屋上から一気に青空へ上昇した。

道路にいる人々がスマホのカメラを、上空へ向けてくる。

（うわ! 撮られてる!）

それだけではない。膝が飛ばしたのか、二機のドローンが下から流奈に近づいてきた。

（ドローンにカメラが付いている! ていうか、スカートの中を撮影されてるっ!）

流奈もネットの動画で、うっかり目にしてしまったことがあった。女性スーパーヒーローをローアングルで撮影したエッチな映像を。

「ひいっ! 逃げなぐちゅ!」

もつと速く飛ぶ、と意識した途端、顔に猛烈な空気が吹きつける。

（ああ、すごい風! いやない、わたしのヘッドが上がってる!）

追いつかなくて二機のドローンが後ろに置き去りにされ、眼下の市街が斜面を急速で見ているように流れていく。強い風圧が顔にぶつかっても、とくに苦しさはなかった。頭の後ろで長い髪が盛大に乱れるのが、身体への唯一の影響だろうか。

「飛んでる! 本当に空を飛んでる! わたし、飛んでるっ!」

あらためて背後に目をやると、翼のまじに広がった陣炎が、翼のように羽ばたいている。その動きはゆっくりとしたもので、どこも急速で飛べる推進力を出しているとは見えない。それなのに流奈の身体は加速していく。

（このまま飛びつづけるのもまずいかも）

そう思うと、ピタリと空中で静止した。身体が軽く前にカクンとなったが、それ以外の衝撃はない。空中に立つたまま、おそろおそろ指先で背中に触れてみる。本物の陣炎同様に身体といえるものはない。指がナース衣装の布に当たる。

（ナース服は破れてない、服を突き破って、身体から出てるわけじゃないのね、よかった。空を飛ぶたびに服が破れるのじゃなく、それじゃあ方向を変えるときは……）

動物番組で見たハヤブサが空中で一回転する映像を思い浮かべた。途端に陣炎が揺らぎ、形を変える。流奈の身体が加を推いて上昇する。

「うわあっ!」

ハヤブサというよりも遊園地のループコースターに、自分がなつた気がする。気がつくに、一度三度と空中に円を描いていた。さらに頭の中で稲妻を想像すると、シグザグに動きながら宙返りできた。

「本当に自由自在に飛べる!」

つい歓声を上げると、足下から喧嘩が聞こえた。いつの間にか十人あまりの人々が立ち止まって、流奈を見上げている。

「さっきのことがニュースになってるのかな。ナースの仮装で町の中に降りたら、もともと人が集まってきたぞ。仮装のままでマンションに帰るわけにいかないし……!」

とりあえずの打開策として頭に浮かんだのは、市街を離れることだった。再び加速して、郊外に見える山々へ向かって飛んだ。長本市は県内では最も大きな市だが、中心を離れば農地が広がり、山脈の裾野が迫っている。

「山の中に入って、佳衣に連絡して、あっ、スマホ持っていない! あああ、財布も持っていないよ!」

自宅にいるときはスマホと財布はテーブルに置いておくのが、流奈の習慣だ。ないとわかっていても、両手でナース衣装のポケットをまさぐってみるが、入っているわけがない。

「どこかで電話を借りないか。あ、文庫!」

眼下に農村が見える。まばらな家の集まりの間に、交番の建物があり、制服警官が外を歩いている。文庫から数メートルほど離れたところから音がはじまっていた。

森の上へ向かって移動しようと考え、ひとりで背中から広がる陣炎が揺らめいて、まっすぐ飛んでいた流奈の身体がカーブをきった。森の上から樹々の隙間へ降りて、地面に着地すると、顔に巻いた包帯をほどき、顔のナースキャップをはずして、ミニスカフンピースを脱いだ。幸い、下には白スポートシャツとショートパンツを着ている。堪えないかもしれないが、気にしてはいられない。

ナースの仮装一式を木の枝に結びつけて、森から出ると、交番へ向かった。警官にスマホと財布を落としたと説明して、固定電話から住衣のスマホにかけさせてもらった。

「もし」

と、もしもを言い終わる前に、受話器から住衣の爆発的な声が轟いた。

「流奈、スらいことになってるよ！ さっきからテレビのローカルニュースで『未知の脅威』のことばかり！」

「アンノウンナース？ なんなの、それ？」

「流奈のこと決まってるよ！ スマホやドローンで撮影した流奈の映像がずっと放送されてる。撮影している人の『アンノウンナース』と言ってる声が入って、そのまま流奈の呼び名になったの。二次大戦のヨーロッパで、包帯で顔を隠したナースがあちこちの戦場に現れて、戦争に巻き込まれた一般人の救助をしたっていう『アンノウンナース伝説』があるんだって」

「その話は後でするか」

「流奈が空を飛べるって知らなかったよ。どうして教えてくれなかったの？」

「今日、生まれてはじめて飛んだんだから、自分が驚いてる」

「そんなことがあるんだ」

「早く迎えに来て！」

「わかったわかった」

☆

住衣は交番の前までタクシーで来てくれた。

森の中のナース衣装を回収してからタクシーの後部座に乗ると、住衣が常用のタブレットでニュースを見せてくれた。無我夢中でやっていた人命救助の姿が、様々な構図で撮影されている。「ナースだ」「ヒーローか」「はじめて見た」と様々な声が聞こえて、なんだかたまらなく恥ずかしい。

そして本当にアンノウンナースと呼ばれる、テレビでもよく見るアウンサーもコメンテーターもタレントもそう呼んでいる。スーパーヒーローウォッチャーなる同書の人物が、うきうきした表情で解説もしていた。

「今日、長本市に現れたアンノウンナースは、コスチュームやオフビート能力から見ても、今まで一度も活動の記録のないヒーローです。私は新たなスーパーヒーローの登場を大いに歓迎しますよ」

その後、アンノウンナースという呼び名がついた理由が語られた。二次大戦のヨーロッパで大勢の人人々が命を助けられながら、写真や映像には残らないという、顔を包帯で隠した神出鬼没のナース。かつては心霊の類と思われていたが、オフビートの存在が知られてからは、スーパーオフビートのデビュー以前に秘かに活動したスーパーヒーローたちのひとりだとも考えられているという。そして二次大戦が終わるとともに、アンノウンナースは現れなくなった。

マンシヨンの自室にもつた流奈は、バスルームでシャワーを浴びながら待った。

「アンノウンナースなんて全然知らなかった」

バスルームのドアの前に立つ住衣が応える。

「まあ、ヨーロッパの戦争が終わったのだから、ググっても日本では歴史マニアしか知らないみたいよ。ホラーキアラのつもりで包帯で顔を隠したナースの仮装を考えたのにビックリだよ。下手したら著作権侵害になっちゃうかも。で、流奈はこれからどうするの？」

「どうするのって、どうしたい？」

「もちろんスーパーヒーローデビューした流奈は、これからというヒーロー活動をするのか、というところ」

ガラス戸を勢いよく開けて、流奈は濡れた顔を出した。

「スーパーヒーローはやらない！」

「ええー、残念。アンノウンナースとは違う別のコスチュームとヒーローネームを考えたのに」

住衣は目を輝かせて、ニンマリと笑って、流奈を見つめた。

「どんなのか、知りたいでしょ」

☆

長本市で起きたビル火災は、救助活動が滞っていた。炎に追われて屋上へ逃げた人々に、梯子車がつかない。

消防隊の隊員はいつもの窓から炎を覗き上げるビルを見上げて、諦めしながら救出方法を懸命に考えている。

ふいに、背中をつつかれた。ふりかえると、黒髪の頭に白いナースキャップを載せて、顔の上半分を隠す白いアイマスクをつけた若い女がいた。

着ているのは身体にひつたりとした白い服。半袖のシャツと膝上までのオースパッツが一体化したような衣装だ。

ふくらんだ胸の中心には、炎を上げる赤い十字の模様がある。

両足には白い褲丈そっくりブーツ。

奇妙なコスチュームの女は、火事場の喧騒に負けない大声で話しかけた。

「あの、すみません、わたしは空を飛べます。お手伝いできることはありませんか」

隊長はスーパーヒーローに会ったことはなかった。超常の正義の味方たちはニュースの向こうの存在だ。それでも臨時に理解した。

「頼む。まだ何人も屋上に閉じこめられている。救助してくれ！」

「あの、梯子車のゴンドラをはずしてもいいですか」

「かまわない。あのゴンドラを使ってくれ」

隊長が梯子車から伸びるゴンドラのひつをつを指さした。

「はい！」

流奈は背中から陣炎を放った。瞬間で自由に陣炎を出したり消したりできるようになった。空中の移動も思った通り。すぐさまゴンドラのそばに近寄り、両手で梯子をしかりと握ると、ゴンドラに乗っている消防士に声をかけた。

「隊長さんの許可をもらいました。ゴンドラをお借りします」

「えっ？」

驚く消防士にまじまじと見つめられる前で、流奈は口を開き、青い炎の刃をふるって、様子を切断する。両腕に大きな重傷がかかるが、流奈の身体は空中に浮いたまま。またまた余裕を感じ、もつと重いものを持ち上げられるだろう。肉体のキアを上げた状態だと、どれだけの腕力を出せるのか、自分でも推し量れない。

消防士を乗せたゴンドラを持って、ビルの上面に沿って、炎を避けながら上る。たちまち屋上に出ると、ゴンドラを置いて、声を上げた。

「みなさん、助けに来ましたーわたしのことは知らないと思いますが、ちょっと前にニュースでアンソウンナースと呼ばれた新人ヒーローです。ゴンドラに乗ってください！」

屋上には五人の男女がいた。全員がサリーマン（OL）。突然のことにとまらつていたが、消防士にうながされて、ゴンドラに駆けこんだ。

五人全員がゴンドラに乗ると、流奈は合計六人の体重をものもしないで屋上から飛翔した。

五人が今にも墜落しそうに感じて、口々に悲鳴を上げるなか、流奈は慎重にゴンドラを道路へ着地させた。救命隊員が駆け寄り、五人の体調を診はじめる。

流奈は安堵の息をつく間もなく、誰かに呼ばれた。

「別の階にも逃げ遅れた人がいる。救助してほしい」

消防士が使用しているトランシーバーのボチを手渡された。流奈はボチを腰に巻くと、再び建中の煙を分けて飛び立った。

ビルが鎮火すると、流奈はわざと目につくように飛んで、じやまにならないように火災現場から離れた公園に降りた。たちまち追いかけてきたマスコミとカメラをかまえた野次馬に包囲される。

矢張り早に飛んでくる質問の声に抗って、大きな声上げる。

「わたしは前にアンソウンナースと呼ばれたオフェーティブです。あのときはたまたまハロウィンの仮装の準備をしていたときに、事故を知って飛び出しました。ですから仮装のアンソウンナースとわたしは全然関係がありません」

とりかかむ人の輪のあちこちから夫婦の声が聞かれた。流奈と佳衣が見たツイッターや匿名掲示板には、長本市のアンソウンナースが本物ならば二次大戦の結が聞ける、と期待するメディアの連絡もあった。

「あれからいろいろ考えて、あらためてヒーロー活動をしたいと思います。これからはマイティナースと呼んでください」

マイティナースというヒーローネームを提案したのは佳衣だった。流奈は「単純すぎないかな」と言ったが、佳衣は「近ごろのヒーローネームは考えすぎなのよ。日本の元祖ヒーローのキャプテン・スカイや、サンダークラップスのスターサンダーを見習うべきよ」と主張されて、押しきられてしまった。

マイティナースという名前にとんな反応があるかと内心ドキドキして待つしていると、拍手が湧き起った。ホッと息をついて、結果をつけた。

「あの、わたしは犯罪者（壁う）ことはできません。事故や災害の救助だけを専門にします」

記者のひとりから質問が飛んできた。

「その白地の胸に燃える十字の新コスチュームは、サンダークラップスのフレアに似ているようですが、フレアとは関係があるのですか？」

サンダークラップスは東京で活動する比較的新しいスーパーヒーローチーム。女性四人のチームで、フレアはその一員だ。空を飛び、おそらく日本のヒーローたちのなかでも有数の剛力を誇る。

フレアのコスチュームは、白いミニスカートのワンピースで、胸には『^{フレア}太陽閃光』のヒーローネームに小さく黄色い太陽をデザインしたシンボルマークを描いている。

今着ているコスチュームも、流奈と佳衣の共同のお手製だ。胸の炎の十字は流奈のアイデア。

「わたしはサンダークラップスに直接会ったことはありませんが、ニュースで活躍は見てます。このコスチュームはフレアたちへのあの人の襲撃から下卑た男の声が上がった。」

「月刊ヒーローピンクマガジン」の巻です。フレアといえは、ちょっと前にフレアの工口の中継があったけど、つわ、離せ、なにをする、うぐっ」

記者の周囲の人々が『いいかげんにしろー』と怒鳴り、口をふさぎ、羽交い絞めにして「さかへ連れて行つた。新米スーパーヒーローは安堵の息をついた。」

第二章 はじめてのウィランとの闘い

行政区分上では農本市内にふくまれている山の中で、登山者から脱落した岩壁に脚を挟まれて動けない、というスマホの連絡が山岳救助隊本部に入った。

山岳救助隊からすぐさま流奈のスマホに活動要請の電話がかかった。このスマホは流奈が普段使用しているものとは別のもので、県警本部、消防本部、山岳救助隊本部だけに番号を教えてあるマイティナース専用だ。

流奈が出動要請を受けたのは、日曜日の午前十一時すぎ、ひとりで市立図書館の書架の間で大正文学の資料を探していたときのこと。すぐさま図書館を出て、出動を承諾すると、佳衣のスマホに連絡した。落ち合う場所を決めてから、図書館の扉の陰に身を潜めて、バックから出した白いマスクを顔につけて、静にナースキャップを被せる。

普通の衣服でもマスクとナースキャップをつけていれば、マイティナース警備服として認められるほどには有効になった。

「よし！」

胸の前で両手の指をキックと握って気合を入れる、背中から陣炎を上げ、一気に青空へ飛出した。

登山者が岩の下敷きになった山の麓で、バイクに乗って駆けつけた佳衣と落ち合った。インドア派の流奈の親友だが、佳衣はアウトドアの趣味をこなし、一輪免許を持っていて、マシンの駐輪場に愛車のバイクを置いている。

佳衣は背中の大きなキャン핑用のザックから白い半袖とスパッツのボディスーツとブーツを出し、流奈が急いで着替えて、マイティナース完全版となる。

「マイティナース、気をつけてね」

「ありがとう、エイト」

マイティナースになっているときは、佳衣も「ローネームほく『エイト』と呼ぶことにした。佳衣自身の発案で、看護助手を意味する英語のひつナリング・エイトから名付けた。流奈はマイティエイトにしようと思ったが、佳衣が断った。

流奈からマイティナースになると、空を飛び、山岳救助隊本部に降りた。状況の説明を受けてから、医師をベルトで背中中に固定して、両手に救急手ットを持って、山へ向かって飛んだ。

幸い、要救助者はすぐに見つかった。脚を押さえていた岩は、マイティナースの腕力で離れろのけられた。医師の応急処置を受けた後に、マイティナースは登山者を抱えて、麓の病院へ運んだ。

「救助は終わったよ。右足は切断するかもしれないけど、命に別状はないですよ」

「そいつはよかった。今はさっさと別れた場所の近くの河原にいるから来て。上から見えると思う。すぐ待てのいいところだから、ここをランチにしようね」

「OK、すぐに行くから」

スマホの地図を頼りに飛ぶと、眼下の緑の森の中に川が通っているのが見える。川沿いに開けた空き地があり、エイトが白いタオルを振りまわしていた。足元にはシートが敷かれて、バスケットと食器と食べ物が並んでいる。

マイティナースはほとんど川岸に降り立つと、背中に負った緊急救命包をエイトへ差し出した。

「救助隊からおれだって、手作りの山菜料理をもらっちゃった。本当はスーパーヒーローが助けた人から謝礼を受け取るべきじゃないと思うけど、これくらいいいよね」

エイトが風呂敷を開いて、タッパーに入った山菜の煮物を見て、小鼻をふくらませて匂いを嗅いだ。

「おいしそうない！ いいんじゃない。ささやかな感謝の証くらいはごちそうになっちゃって」

マイティナースの活動をはじめたときは、レスキューのプロたちから仕事を奪うこと文句が出るかと思ったが、いち早く人命を救助できることを感謝されるばかりだ。マイティナースがいなければ、現場に機材を運ぶだけでも時間がかかり、また悔しい思いをしたかもしれない、と何度も言われた。

マイティナースはマスクとナースキャップを取って、流奈にもうた。コスチュームの白いボディスーツは着たままだが、黒縁を出せば、鼻の上では流奈だ。

そしてエイトも、見た目はなにも変わっていないが、佳衣に口を開く。

流奈と佳衣の二人はシートに座り、バスケットから出した食パンと保存食とペットボトルを食器に並べた。マイティナースが人里離れた場所に出動したときのために、日よから用意しているものだ。

二人して涼しげな川面をながめながら、山菜に舌鼓を打ちつつ、佳衣はスマホにニュース動画を出した。

「もうマイティナースの救助活動がニュースになっているよ。さすがに街中と違って動画の数は少ないね」

「母さんからメールが来た」

流奈が自分の普段用のスマホの画面を、パートナーに見せた。

『また人を救ったのね。私も高いいです』

流奈はマイティナースとして活動する決意をしたときに、両親に話した。他のヒーローたちがどうしているのかは知らないが、親に秘密にすることは、流奈にはありえなかった。

流奈は捨てた。だ。

県内で大きな農場を経営している裕福な今咲夫妻は、今から十九年前に自分の畑で赤ん坊を保護した。当時は警察に届けられたが、赤ん坊の素性も不明のまま終わった。該当する出生の記録もなく、赤ん坊が連れて去られたという通報もなかった。一度も診察を受けることなく出産した、言葉は悪いがいわゆる野郎産が捨てたのではないかと、警察は判断した。

今咲夫妻は赤ん坊に流奈と名づけて、養子にした。

やがて流奈がオフトートの能力を発現しても、養父母の愛情は変わらず、大学生になった今も愛情と仕返りをそいでくれている。

「父さんと母さんからは、マイティナースはいつかいていい。でも必ず大学を卒業して、好きな学問の世界へ行くように、と言われてる」

「いいなあ、親が夢を後押ししてくれるんだから、ひゃっ！」

「ああっ！」

心地よい川のせせらぎを聞き流して、背後からげげと大きな音が出た。そうしてふりかえった二人の前で、顔を突き破って、人影が飛び出す。そのままボールのように転がり、川べりの石の上でぐんぐん返して倒れる。

「ひゃっ！」

「ひゃっ！」

「ひゃっ！」

「ひゃっ！」

「ひゃっ！」

大小の石が並ぶ地面に磨はいになつてうめく男は、チェックのシャツにデニムパンツにスニーカー。いかにも専門的ではない山歩きファッションだ。

「あの、大丈夫ですか」

「じつかりし」

流奈と佳衣は駆け寄り、二人がかりで男を起した。

持ち上がった顔は、二十代半ばの青年だった。公共放送のニュース番組を担当する新人男優がナウンサーという雰囲気、真面目で誠実さを感じさせる整った目鼻立ち。

好感の持てる容貌だからこそ、顔や右の頬についた擦り傷がいっそう痛々しい。シャツやデニムパンツのあちこちにも土や泥がついて、普通の登山道を歩いてきたのではないことをうかがわせた。

上体を起して地面に座った青年は、流奈の顔をしげしげと見つめた。

「その炎の十字のクロスチームは、ナースキャップとマスクがないけど、もしかしてマイティナース」

「あつ！ えつ！」

流奈はあわてて右手で顔を隠して、左手をハタバタさせる。

「違つ違つ！ これはただのクロス！ ただのマイティナースのファンだから！」

「えつ、でせ」

怪訝な顔になる青年の背後で、再び動がざわめいた。さっきよりも大きく木々の葉と枝が揺れて、ガラガラとしゃがれた声が聞こえる。

「見つけたぞー」

断の枝をへし折り、葉を散らして、新たな影が又と出現する。

異様な人物だった。ヘビー級のブロスラー並みの全身を、スピードスケート選手が着用するウェアのよななびたりした衣服で被っている。その表面には爬虫類の鱗そっくりの凹凸があり、熱帯のジャングルに棲息するトカゲや蛇さながらの力つるな模様があつた。そのくせ顔だけは白い楕円形の凹凸のない板面、目の部分にだけ二つの穴が空いていて、養育者の人間の頭が映く。

「二層堂降参、抵抗はやめろ」

威圧的な命令とともに、爬虫類男の太い右腕が前に突き出された。手には銃が握られている。ガンマニアが見れば「なんだ、それ」と画を上げそうな、世界中のどここの悪党も軍隊も使用していない銃だ。サイズはサブマシンガンで、持ち主がコーチネットとはかりに表面に鱗のモールドがあり、ギョギョと派手なカラリング。

子供向けのおもちゃにも見えるが、間違いない本物の武器が持つ迫力がある。

（銃！ 銃を持つてる！ 人を撃とうとしてる！）

そう認識した瞬間、流奈は後先考えられずに反応していた。口から青い炎の刃を吐き、鞭のように伸ばして、爬虫類男の手にある爬虫類マシンガンを薙いだ。

スッパリとマシンガンが二つに切断される。

後から考えれば、少しでも炎の刃の軌道がずれていれば、男の右腕を切り落としていたかもしれないが、今はその危険は浮かばなかつた。

「えつ、なんだ!?」

爬虫類男にはなにが起きたのか、わからなかつた。一瞬、青白い輝きが自分に向けられたかと思うと、握っているマシンガンの前半分がなくなり、きれいな断面を見せて足もとに転がっている。

「きやあああつ」

流奈は悲痛に聞こえる叫びを発して、地面を蹴って、正面から爬虫類男の分厚い胸板に飛びこんだ。猛烈なタックルを食らわされて、巨体を背後に押し倒す。根っからのインドア派の流奈に、格闘技の心得などない。無我夢中で両手で爬虫類男の右の足首をつかんだ。

「きやあああああああああつ」

両手を踵上に振り上げる。自分よりも身長も厚みも大きく、何倍も体重がある巨体が空中に浮かぶ。そのまま足首をつかんだ両手をムチャクチャに振りまわした。子供にもあそばれるアクションフィギュアのごとく、爬虫類男が空中をグルグルと回転させられる。

「きやあつ」

無意識に両手の指を開いた。遠心力で爬虫類男の身体が何メートルも飛び、頭から断の真ん中に突っこみ、そのまま動かなくなる。断から突き出たたくましい尻と面脚から力が抜けて、だらりと伸びた。

そのとき、別の断の中から、流奈も佳衣も聞いたことがない音がババババツと連続して鳴った。

流奈は白いボディスーツに包まれた胸に衝撃を感じる。軽い痛みとともに、足もとに小さな金属がいくつも落ちた。刑事ドラマでしか見たことがない形をしている。

「銃弾！ う、撃たれた！ わたし、撃たれた！」

レスキュー専門のヒーローをやっているマイティナースは、今まで銃撃を受けたことはなかつた。建設中のビルから落ちてきた大きな絶材が激突したことはあるが、身体をギアを上げている間は負傷しない。よく考えれば銃弾も同じだが、心理的な意味が大きく違う。

「うわあああああ！」

叫びとともに口から炎が放たれる。マシンガンを切断した青い刃ではなく、火花放射器のような赤い大きな炎が、射撃されたと思う断に襲いかかる。

「きやあああ！」

野太い悲痛とともに、燃える断の中から気絶した爬虫類男と同じクロスチームのマッパヨが跳び出した。

「このっ！」

撃たれた精神的ショックを振り棄にして、流奈は第二の爬虫類男の白い板面に叩きこむ。素人のパンチだが、ギアを上げた流奈の常人を超える運動タッシユから繰り出された一撃、常人にかわすのは不可能だ。

「クック」

と、変な声を出して、爬虫類男の身体が地面に埋たわった。

「火つ！ 流奈、火を消して！ 山火事になっちゃうー」

佳衣の叫びを聞いて、流奈はあわてて薪を燃やす炎に意識を向ける。自分の口から出た炎は後からでも自由に操れることが、子供のころからいかに美談してわかっていて、消えろ、と念じると瞬時に薪の炎が鎮火した。

佳衣が意識のない二人の役人物の呼吸を確認してから告げた。

「すていよ、これで流奈は終で撃たれても平気だとわかったね」

「平気じゃないよ！ 死ぬかと思っただけ！ ほう！」

流奈はコスチュームの胸に付いた黒い痕を指さしながら、佳衣に歩み寄り、ギョッと指さしめた。

「佳衣に当たらなくてよかった。今日ほど自分の身体が凍文でよかったと思ったのはじめて」

「あの、やっぱりマイティナースですか」

背後から、一瞬留降史と呼ばれた青年の声が聞こえた。

二人がふりかえると、降史は地面に正座して、真摯な表情で見つめてくる。

「助けてください。ぼくの両親を救い出してください」

「はいはいはい」

「ぼくの両親……」

降史の両親は、一般的には知られていないが優秀な結学者という。最近、バイオテクノロジーの分野で画期的な成果を出した。だが論文を学会に発表する前に、犯罪組織に拉致された。そして降史のところに、隠してある研究データを持ってくるように脅迫が来たのだ。

呼び出された場所が、この山の中にある犯罪組織の秘密基地。組織はデータを渡しても両親を解放するつもりはなく、降史も殺されると思われてきて、流奈と佳衣に運ばれた。流奈に倒された一人は、組織の下級の構成員だ。

「わたしはレスキュー部隊で、今まで悪人と闘ったことなんてない」

とは、思っても口に出せなかった。降史の悲痛な顔を見ていて、断ることが罪深く感じる。

「わたしは普通の人間にはない力がある。その力を、人命を救うために使った。今、使わないで済むの！」

流奈はとなりの佳衣へ顔を向けた。佳衣も顔を向けて、互いに見つめ合い、すぐにうなずき合った。

「マイティナースの出番だね」

「最後まで言わないで、わたしもエイトするよ。わたしは二階室さん連れて、バイクで安全なところまで退避する」

「お断り」

流奈はシートに置いたナスキャップとマスクを頭と顔に装着した。マイティナースとして、降史に自信を感じさせ、安心感を与えようと、声に力をこめた。

「両親のことは、マイティナースにまかせてください！ 二階室さんはパートナーのエイトとともに安全なところに身を隠してください」

「ありがとうございます」

降史はシャツのポケットからプリントした写真を出して、手渡してきた。受け取ると、白玉を着たいかにも頭が良そうな中年の男が、実験室らしきものを背にして、なにかよく並んでいる。

「父と母を拉致した犯罪組織の名前は『爬虫類のハニ』です」

マイティナースとエイトはそろって指図を、倒れているカッフルな結核様のマッチョ男へ向けた。

「それで下つ端がああファッション、ああマシガンなんだ」

「無駄に凝って、お金ばかりつるね」

☆

下つ端の手足を縛り、統一コスチュームのポケットにあつた蛇柄のスマホで地図を出す。秘密基地までの場所がわかった。

地図を頼りに山奥に分け入ると、崖にぶつかった。下つ端のスマホに反応したのか、ひとりでに岩がスライドして人工の穴が開いた。

マイティナースははじめての体験に緊張しながら、コンクリートで固められたトンネルの中をそろそろと歩いた。幸いにもトンネルの中では誰にも遭遇しなかった。

（監視カメラがないのか。悪の組織も意外と人手不足？ 面接で、入社したらあんな緊張した顔でなくちゃいけないと言われたら、わたしも怖くない……）

緊張しながらも、つくづく知らないことが頭に浮かんでしまう。ニュースではスーパーヒーローとスーパーヴィランとの闘いがよく報じられるけれど、それは都合での出来事だ。田舎の農家で育ち、地方都市の大学に通う自分には、遠い世界の話でどうにもピンとこない。

無人のトンネルの突き当たりの鉄の扉も、やはりスマホが自動で開けた。扉の向こうを目にした途端、マイティナースは構え直になった。

そこは高校の教室ほどの広さの部屋だが、中央を透明な壁に仕切られていて、いっぽうにだけ人がいた。すべて年代らしい若い女が十数人。降史の両親は見当たらない。だが降史の両親の存在を探すことなく、新人ヒーローの意識には浮かばなかった。

透明な壁にしか見えない場所にいる女たちは全員だ。

全員が美しいが、そろって虚ろな表情。ドキュメンタリー番組で見た麻薬中毒者のようだ。グラビアアイドルのように抜群のプロポーションの肉体には、布一枚もまわらず、豊満な乳房も女の秘密の部分もさらけ出しているが、羞恥の様子は微塵もない。

裸の女たちはなにをするでもなく、ただ床に座りこんでいた。

さらに異様なことに女たちの裸の顔面や尻や股間の周囲を、多数の蛇の群れが這いまわっている。

蛇は長さからまちまちだが、すべて黒い。爬虫類の鱗が持つ光がなくて、まるで闇を凝り固めたようだ。田舎の農家の邸であるマイティナースについて蛇はごく普通の動物で、悪感情は持っていない。だからごく具体的になにが違ふとは言えないが、普通の蛇とは違ふ異様なものを感ずる。

黒蛇たちはうねうねとねりながら、床だけではなく、女たちの肌にも這い上つていた。首や胴体に巻きつき、乳房の表面を進み、太腿の間にも這りこんでいる。明確な意思を持って、裸の女たちをまとわりついているように見える。

「こんな……こんな！」

あまりに非日常でショッキングな光景を見せつけられて、マイティナースの脳内がコズチーム同様真っ白になる。その白の下から、怒りの赤い炎が噴き上がった。状況はさっぱりわからないが、女がこんなあつかいをされるのが正しいはずがない。事故や災害ではありえないものが、目の前にある。

「これは悪だ！」

見まわしても女たちを閉じこめている部屋に、出入りの口は見当たらない。

（炎で透明な壁を焼き切る！）

口を開いたとき、背後から声がした。調子の悪いスピーカーから流れたようなノイズ混じりのひずんだ声だ。

「なんだ、おまえは？」

ふりかえる。亀がいる。

後ろ足で固立する人間大の亀。床に立つ二本の足から亀の頭部まで二メートル近い全身が、固きあげた金のように輝いている。有名な亀の怪獣映画の着ぐるみと思われるが、海亀に似た頭のくちはし状の口の先端から、甲羅から伸びるしっぽの後端まで、明らかに全身が黄金に見える金属製だ。

甲羅から伸びる左右の前足の先には、それぞれ五本の指があるので、やはり中に人間が入っていると思われる。

海亀の頭は、左右の眼孔の中にある眼球も金属だ。中に人の顔があるにしても、外からはまったくかえなかった。

とはいえそんな細部のディテールを、マイティナースが認識する余裕はなかった。女たちが受けている虐待への怒りを燃料にして、口から吐いた細く研ぎ澄ました青い炎の刃を、黄金亀の甲羅の腹へぶちこむ。厚い鋼鉄を貫通し、焼き切る炎の刃が、大亀の腹にがつかり、その表面を滑って広がった。

（ええっ！）

炎の刃を止める。大亀の金色の腹の表面に、なんの变化も見られない。溶けた痕も、切れた傷もない。黄金の輝きはまったくくさんでいなかった。

「そのコズチーム、その口の火、新人ヒーローのマイティナースだナ」

亀の口が力ずかりと開閉して、外国人が話しているような訛りのある日本語が出た。口が大きく開いても、覗けるのは金色の口内と舌だけ。

「小娘の火な、この『黄金の甲殻』様のエイリアンワールドには熱くも痒くもない」

「このっ！」

あらためて一度二度と炎の刃で斬りかかると、ゴルデンシエルの言葉通り、甲羅も、手足も、頭も、表面で炎を滑らせるだけで、なんの効果もなかった。

「うわあっ！」

どうしていいのかわからず、背中の中を炎が広げて突進し、両手の拳でゴルデンシエルの腹に殴りかかる。まるで低反発素材を殴つたような感触があり、自分の腕力が吸収され、散らされているのがわかった。

「弱いッ」

幸しげな嘲笑が、マイティナースの頭上の亀の口からあふれる。同時に腹の甲羅がスライムのように**露**き、二つの拳が金色の金属に呑みこまれた。

「ああー」

手だけでは足りない。ゴルデンシエルの面足が形を崩し、溶けた鉄のようにマイティナースの左右のブーツにからみついてくる。あわてて手足を引くとなが、ギアを上げた剛力を叩きつけて、黄金のスライムから逃れられない。

こうなったら、亀を連れて、トンネルから飛んで逃げるしな」

「あひっ！」

喉に鋭い痛みが走った。いつの間にか黒い蛇が影のように前に巻きついて、大きく開いた口から生えた二本の鋭い牙を、喉に深く突き刺している。

「あ、ああ……」

マイティナースの意識が、急速に揺蕩していへ。

（毒……毒が身体に……）

遠くから聞こえる山影のように、眼前にいる「ゴルデンシエル」の声がぼんやりと聞こえた。

「じい、いらん手出しをするんじゃねエ」

「悪いが、ススススボンサーの指示でな」

はじめて聞く奇妙な声とともに、マイティナースは闇の中に転がり落ちた。

第三章 黄金に輝く処女陵辱

充分に安眠したように、マイティナースはスッキリと目が見えた。

目の前にはじめて見る大きな部屋が広がっている。山の中に築いた秘密基地らしいコンクリートのトンネルや、透明な牢獄だけの殺風景な部屋とは一転して、テレビでしか見たことのないヨーロッパの貴族の豪邸の中のような部屋だ。

厚手のカーペットの上に、立派な黒いテーブルいくつかの椅子。派手な装飾はないが、ひと目で高価なアンティークだとわかる。さらにテーブルの上には、おしゃれな箱飾のティーツェット。マイティナースも名前を知っているヨーロッパの有名ブランドの高級品だ。

とても快適そうな室内だが、マイティナースは快通とはほど遠かった。身体を動かせないのだ。目の前の優雅な装飾には似合わない鋼鉄の壁を背にして、寝状態にされている。左右に伸ばした両手の手首とそろえて床に立つ両足の足首に、金色の金籠の枷がはめられて、前後の壁にくっつけて立たされていた。

（こんなもの！）

手足に力をこめて黄金の枷を破壊しようとしたが、びくともしない。金籠や壁が頑固というよりも、思ったように力が入らない。

（腕力でめめなら、焼き切る！）

口を開き、青い炎の刃をイメージする。

出ない。幼児のころからなんの努力もなしにできたことができない。何度も口を開けては開いて、意識を集中して、気をこめても、炎を出せなかった。

「無駄だよ、マイティナース嬢」

部屋に若い男の声 flowed。こんな状況でなければ思わず聞きほれてしまいうるにややかな魅力にあふれた、人型男性声優のような声質だ。視線をめぐらせても見つけられないが、どこかにカミラとスピーカーがあるに違いない。

「特別な蛇の毒がまわって、マイティナース嬢のオビート能力が使えなくなっているのだ。能力が消えたわけではないから、安心してくれたまえ」

マイティナースの対面にある壁の木製ドアが開き、二つの異様なものが入室してきた。

「こうして寝にしている。マイティナース嬢は羽を折って標本箱に収められた蝶のようなじつに美しい」

イクメンボイスで、美術品を愛でる口調で語ったのは、目の前にいる恐竜。

それもティノサウルス・レックス

「そしてサイズは人間レベル。そして現在のティノサウルスの復元図にある身体を地面に水平にする姿ではなく、昭和の恐竜図鑑に描かれたような身体を直立させている姿勢だ。しかも前脚はティノサウルス独特の小さなものではなく、人間と変わらない形。

かつて科学者が推測した、恐竜が知覚生物に進化した姿恐竜人間に似てくもなない。

しかしティノサウルドは、武器で大きな頭の上に黒いシルクハットを載せてはいない。右目に実用になるとは思えない丸いレンズの片眼鏡をくっつけていない。太い首に、黒い襟ネクタイを巻いていない。右手に黒いステッキを持っている。

イクメンボイスで、美術品を愛でる口調で語ったのは、目の前にいる恐竜。

それもティノサウルス・レックス

「そしてサイズは人間レベル。そして現在のティノサウルスの復元図にある身体を地面に水平にする姿ではなく、昭和の恐竜図鑑に描かれたような身体を直立させている姿勢だ。しかも前脚はティノサウルス独特の小さなものではなく、人間と変わらない形。

かつて科学者が推測した、恐竜が知覚生物に進化した姿恐竜人間に似てくもなない。

しかしティノサウルドは、武器で大きな頭の上に黒いシルクハットを載せてはいない。右目に実用になるとは思えない丸いレンズの片眼鏡をくっつけていない。太い首に、黒い襟ネクタイを巻いていない。右手に黒いステッキを持っている。

イクメンボイスで、美術品を愛でる口調で語ったのは、目の前にいる恐竜。

それもティノサウルス・レックス

「そしてサイズは人間レベル。そして現在のティノサウルスの復元図にある身体を地面に水平にする姿ではなく、昭和の恐竜図鑑に描かれたような身体を直立させている姿勢だ。しかも前脚はティノサウルス独特の小さなものではなく、人間と変わらない形。

かつて科学者が推測した、恐竜が知覚生物に進化した姿恐竜人間に似てくもなない。

しかしティノサウルドは、武器で大きな頭の上に黒いシルクハットを載せてはいない。右目に実用になるとは思えない丸いレンズの片眼鏡をくっつけていない。太い首に、黒い襟ネクタイを巻いていない。右手に黒いステッキを持っている。

イクメンボイスで、美術品を愛でる口調で語ったのは、目の前にいる恐竜。

それもティノサウルス・レックス

「そしてサイズは人間レベル。そして現在のティノサウルスの復元図にある身体を地面に水平にする姿ではなく、昭和の恐竜図鑑に描かれたような身体を直立させている姿勢だ。しかも前脚はティノサウルス独特の小さなものではなく、人間と変わらない形。

かつて科学者が推測した、恐竜が知覚生物に進化した姿恐竜人間に似てくもなない。

しかしティノサウルドは、武器で大きな頭の上に黒いシルクハットを載せてはいない。右目に実用になるとは思えない丸いレンズの片眼鏡をくっつけていない。太い首に、黒い襟ネクタイを巻いていない。右手に黒いステッキを持っている。

イクメンボイスで、美術品を愛でる口調で語ったのは、目の前にいる恐竜。

それもティノサウルス・レックス

「そしてサイズは人間レベル。そして現在のティノサウルスの復元図にある身体を地面に水平にする姿ではなく、昭和の恐竜図鑑に描かれたような身体を直立させている姿勢だ。しかも前脚はティノサウルス独特の小さなものではなく、人間と変わらない形。

かつて科学者が推測した、恐竜が知覚生物に進化した姿恐竜人間に似てくもなない。

しかしティノサウルドは、武器で大きな頭の上に黒いシルクハットを載せてはいない。右目に実用になるとは思えない丸いレンズの片眼鏡をくっつけていない。太い首に、黒い襟ネクタイを巻いていない。右手に黒いステッキを持っている。

イクメンボイスで、美術品を愛でる口調で語ったのは、目の前にいる恐竜。

それもティノサウルス・レックス

「そしてサイズは人間レベル。そして現在のティノサウルスの復元図にある身体を地面に水平にする姿ではなく、昭和の恐竜図鑑に描かれたような身体を直立させている姿勢だ。しかも前脚はティノサウルス独特の小さなものではなく、人間と変わらない形。

かつて科学者が推測した、恐竜が知覚生物に進化した姿恐竜人間に似てくもなない。

しかしティノサウルドは、武器で大きな頭の上に黒いシルクハットを載せてはいない。右目に実用になるとは思えない丸いレンズの片眼鏡をくっつけていない。太い首に、黒い襟ネクタイを巻いていない。右手に黒いステッキを持っている。

イクメンボイスで、美術品を愛でる口調で語ったのは、目の前にいる恐竜。

それもティノサウルス・レックス

「そしてサイズは人間レベル。そして現在のティノサウルスの復元図にある身体を地面に水平にする姿ではなく、昭和の恐竜図鑑に描かれたような身体を直立させている姿勢だ。しかも前脚はティノサウルス独特の小さなものではなく、人間と変わらない形。

かつて科学者が推測した、恐竜が知覚生物に進化した姿恐竜人間に似てくもなない。

しかしティノサウルドは、武器で大きな頭の上に黒いシルクハットを載せてはいない。右目に実用になるとは思えない丸いレンズの片眼鏡をくっつけていない。太い首に、黒い襟ネクタイを巻いていない。右手に黒いステッキを持っている。

イクメンボイスで、美術品を愛でる口調で語ったのは、目の前にいる恐竜。

それもティノサウルス・レックス

「そしてサイズは人間レベル。そして現在のティノサウルスの復元図にある身体を地面に水平にする姿ではなく、昭和の恐竜図鑑に描かれたような身体を直立させている姿勢だ。しかも前脚はティノサウルス独特の小さなものではなく、人間と変わらない形。

かつて科学者が推測した、恐竜が知覚生物に進化した姿恐竜人間に似てくもなない。

しかしティノサウルドは、武器で大きな頭の上に黒いシルクハットを載せてはいない。右目に実用になるとは思えない丸いレンズの片眼鏡をくっつけていない。太い首に、黒い襟ネクタイを巻いていない。右手に黒いステッキを持っている。

イクメンボイスで、美術品を愛でる口調で語ったのは、目の前にいる恐竜。

それもティノサウルス・レックス

クニヤリと前に突き出した頭の大きく開いた口からは、上下四本の鋭い牙が生えていて、喉の奥から又別に別れた細い舌が伸びてチロチロと震えている。完全に蛇の口でありながら、人間の言葉をしゃべった。

「ようこそ、マイティナースス。新進気鋭の『当地ススススパーヒーロー』を迎えられて光栄じゃ。」蛇の息に似た音色以外は、しわがれた老人の声。

「エンセント・ボイス」君は見ての通りの通り魔道徳。太古の蛇の魔術を探究して、自分の身体を蛇に変えるほど熱心な学究のまじや。」シエントルマン・レックスがステッキの先で硬い床をコンと叩き、クルリとバントフリングのまじまじにまわした。

「どうだい、恐竜に亀に蛇、酒落ているだろう。レプティル・ホルの幹部にふさわしい人員だ。爬虫類系のヴィランを集めるのは意外と大変だったのだからね。」

「あの女の人たちになにをしたの！」と見ても普通顔の状態でいい。

「マイティナースがぶつけた怒声に、ティラノサウルスの口の端がめくられて、並んだ牙の列を覗かせた。ニヤリとした表情らしい。」

「マイティナース様も普通ではないようだね。レスキュー専門で犯罪者の相手はしない新人ヒーローと聞いているけど、僕たちの異形を前にしても脅えている様子が全然ないじゃないか。」

「マイティナースは自分でも不思議に感じていた。人間離れした怪物犯罪者に捕らえられている異常な状況なのに、恐怖よりも怒りの感情が大きい。二階魔界史の優つた顔と、透明な瞳に閉じこめられた女たちの凄惨な姿が、脳裡を占めている。」

「許さないぞ、どうするのかね？」マイティナース様が予定の時間までに戻らないと、他のスパーヒーローや警察に連絡が行くことがな。

「そんなこと、思いつきませんでした！ 後先考えずに動いたら……でも、そう思わせておけば。」

「そうよ！ すぐに援軍が来るから。」

「基地のある山と周辺の町には、秘かに監視システムを設置してあるのだ。マイティナース様以外の動きは、どこにもないよだがね。」

「……」

返す言葉が見つからない。ニュースではスパーヒーローが犯罪者を簡単に倒して逮捕する映像ばかりが流される。しかし目の前にいる三人は、テレビカメラの前でぐつぐつと気絶していたり、マイクへ向かつて捨てた台詞を聞く途中とは全然違う。やすやすとヒーローの能力を奪い、警察への警戒も怠らない。

「これが本場のスパーヴィラン……本物のスパーヒーローがカメラの外で闘っている相手……わたしみたいなアマチュアが触れてはいけないったのかもしれない。」

今になって怒りが削られて、下から不安が湧き上がってくる。さらに不安を増幅させる言葉が、黄金の亀頭の口から出た。

「もういいだろう。新人ヒーロー様を、俺に味わわせろ。そういう約束だ。」

「もちろん約束は守るよ。レプティル・ホルは構成員の福利厚生がしっかりしたホワイトな企業の組織だからね。」

「えっ、なんに……」

「ゴールドエンジェルが放った言葉の意味を、マイティナースはとっさに理解できず、つい聞き返してしまった。

「嫌めく亀の顔に、人間的生々しいサディスティックな笑が現れる。」

「デビューしたばかりの新人だからって、理言をほさてんじやねえ。女ヒーローが悪党に捕まったら、ムチャクチャに犯されるに決まってるだろっか！」

「嘘っ！」

そんなあたりまえのことに、今の今まで思い至らなかった自分が愕然とする。

「マイティナース！ 今度こそは彼女だ。自分がオフビートであることが、恋愛をためらわせた。本心に委ねをするのなら、相手にオフビートと明かさないとはいえない。不誠実だと考えている。しかし重大な秘密を告白するほど信頼できる男がいるだろうが、その望み通りに、一度も男とつきあつたことがない。」

「性行為どころか、ファーストキスも未経験だった。」

「それだけ大切にしてきたものを、悪人に奪われてしまふ。」

「恐ろしい現実を前にして、マイティナースは渾身の力をこめて全身をしが付けた。手足の拘束は変わらずどうにもできない。胴体だけが前後に動く。背中と尻が何度もバタバタと壁にぶつかる。何度口から炎を出そうとしても、ガスが切れたライターのように火花も散らない。背中と尻の隅も現れない。」

「キアも上からない！ 炎も吐けない！ 空も飛べない！ ミニタントパワーがなくなつて……」

「はじめての体験に愕然とする。生まれたときからあたりまえに使っていた力が使えない。よく想像していたが実現することはないと思つていた。普通の人間になるという感覚に感嘆した。」

「わたしじゃない！ 力のないわたしは、わたしじゃない！」

「置にかつた小動物の無駄な動きを見物するようにマイティナースをながめていたゴールドエンジェルが、前に出た。足を踏み出すたびに、甲冑や頭が天井のライトの光を乱反射して、ギラギラとまばゆい。」

「ひっ！」

目の前に黄金の両手が迫ってくる。マイティナースはこのままコスチュームを破られて裸にされる。と危惧する。

だがゴールドエンジェルの両手は、マイティナースのコスチュームではなく、裸に伸ばされた両腕を握った。コスチュームの半袖から出ている黒肌、黄金の十本の指に二つの手のひらがベタリと押しつけられる。黄金の硬く冷たい黒肌が肌を伝わってきた。

「いい肌触りだ。皮膚の感触からすると、新人ヒーロー様は、千歳前だね。若い小娘は好物だぜ。」

「マイティナースの眼前で、亀の歯のない口がニヤリと笑つた。」

「俺の黄金の姿を見て、純粋な亀野郎と思つてただろう。俺を包みこんでる黄金には、艶気があるんだぜ。並の人間よりも繊細で敏感だ。なにせこのエイリアンゴールドは、旧ソ連軍が極秘にツングースカの爆発跡の地下深くから掘り出した宇宙の物質だから。」

「亀の口が大きく開き、中から舌が長く伸びる。カズレオンのように口外へ伸びた金の舌が、空中をクサクサとたうちながら、マイティナースの鼻先に迫ってくる。先端がマイティナースの右の頬に押しつけられた。」

「あつ、いやあああ。」

「マイティナースは嫌悪に顔を歪しく左右に振りたくる。もちろんそんなことで返られない。逆に顔を動かしたせいで、顔全体を舌に舐めまわされてしまふ。」

「ひいひいひい。あああああああ！」

「あわてて顔を止めても、今度は舌のほうで動きをつけろ。冷たく濡らいい舌が、鼻に、頬に、両頬に這いつまわる。」

新人ヒーローの引きつる美貌を、舌で瞭解しながら、ゴルデンシエルの口から明瞭な悦びの声が出た。
「エイリアンゴールドの機能を自覚めさせよ人間が重要なことだ」と思ふは、死別四の俺を生涯にいやがった、実験に志願すれば、終身刑に刑罰するなんて取り引きじゃねえ。なんの説明もない、俺は宇宙から来たわけのわからねえしるものに押しつけられた、俺と宇宙金属はそのまじり合して、この金ピカの俺の姿になり、二度と逃げなくなつちやうなんだ。おかげで俺はエイリアンゴールドの力を使って重と警察のやつらを倒すに、逃げられたがな。なんで宇宙から落ちてきたものが地球の俺そっくりなのかは、誰にもわからねえが、ほら、見るこー」

ゴルデンシエルの俺の顔の左右の眼珠が横にずれ、眼窩の内側を覗かせる。そこに人間の眼があった。澄んだ青い瞳。まぶたの肌は白人のもの。

「今や、外の空気に直接触られるのは面白くない。俺がまるっきり金属の怪物ではなく、人間だといったひとつの証明だ。おまえも怪物ではなく、人間にキスされるほうが安心できるよ」

「キスっ」

オフビートとして生まれたために愛には興手になつてしまつたが、それでも恋愛には理想や夢をたくましくしてきた。住衣と何度か、恋人ができたあんなことをやろう、こんなところへ行こつ、そんなすてきな日々を送ろう、と語り合い、自分の妄想の恥ずかしさに溺死した。

ファーストキスも、数えきれないほどのパターンを想像した。オフビートの男なら、オフビートの自分を受け入れてくれるかもしれないと考えて、ニユースで見るサイボクや獣人などの異形の男性とパーヒーローとのロマンスも想像した。だからゴルデンシエルの人間離れした姿形がいやなのではない。黄金の俺の中にわたがまる悪辣な人間性がおさまい。

「違う！ こんなキスは絶対に通つ！ ファーストキスが！ わたしの最初のキスが、こんな見ず知らずの悪人に奪われる！ んっ」

「んっんっんっ」

舌に、黄金の舌先を押しつけられる。口ではなく、舌だけで俺の表面を上下左右にペロペロと舐められる。

「この俺の口じゃ、舌を重ね合わせるキスなんてマンチックなことではねえからナ。いきなりディープキスで動井してくれ」

口の外へ舌を出して舌が濡かしながら、あいかわらず俺の口から出る舌は明確にマイティナースの鼓膜を叩く。

マイティナースの舌を思うがままに濡かしながら、ゴルデンシエルの青い目が細くなる。

「美味しいね、新人ヒーローの舌はとちかしも美味しい、とくに舌はすく甘いソ。ただ人間の舌じゃ、女の皮膚の味を精密に楽しむことはできないぜ。エイリアンゴールドとひとつになった俺は世界一の女性グルメだ。次は口の中を味わつて」

「んっ」

マイティナースは必死に舌と閉ざし、前歯を噛みしめて、舌の侵入を防ごうとする。

ギアを上げているときの自分の噛む力はどれほどのものか、試したこともあった。市販の金属スプーンのすくう部分を前歯で噛みちぎり、奥歯でアルミホイルのようにグシャグシャにできた。口から出したスプーンの悲惨な残骸を見て、われながら引いてしまった。

ギアを上げられなくても、絶対に口の中に入れないから！

人生で最も面白い決意だ。

だが堅牢な決意の閉門は、いとも簡単に舌の破壊線に打ち壊された。長い舌全体が削岩機のように回転して、上下の歯の隙間にひびを入れ、弾弓にこじ開けてくる。猛烈に暴れる舌先が噛みしめた前歯にぶつかり、無理やりに進撃する。このままだと前歯の列をへし折られるという危機感が、防衛本能を発動させて、前歯を開かせる。

開いた舌の端列をスルベとこすられて、黄金の舌が口内に侵入してくる。

冷たい！

人間の体温よりも低い温度のものが、口の中に充満する。舌の上や口蓋にスプーンを押しつけられたようだ。

味もしない、金属は金属だ。目の前で金属の俺の顔が快速に濡れ、唯一動く人間の目が紫色に輝いた。

「ヒヤヒヤヒヤヒヤ、こいつは極上だ！ マイティナースの唾液がじつとり染みこんできやがる。美味しい美味い、美味しいぞおオッ」

「んがっ！ むぐぐ！ んぐぐんぐぐんぐぐ」

マイティナースは激しくええうて、口内の異物を吐き出そうとするが、抵抗は無理だった。逆に舌先が喉にまで潜りこんでくる。

「うぐぐんぐぐんぐぐんぐぐ」

喉粘膜を刺激される嫌悪感が、胃の中のをせり上げられた。嘔吐の前兆を感じて、マイティナースは羞恥に震われる。

「吐いちゃう」

悪辣な金の怪物にディープキスをされている以上に、他人に見られている前で吐瀉物をまき散らすなく、女子大生には死ぬほどらしい。

だが食道を逆流した胃の内容物が、喉を犯す舌に触れると、存在感が消えた。

「おおっ、マイティナースのグロを吸吸したソ！ 俺の舌は舐れている物を喰えるんだ。今は新人ヒーローの喉を上ってきたグロを喰ってる。ヒヤヒヤ、マイティナースはグロも美味しいソ」

「そんな、そんなう！ わたしの吐きそうになったものを喰へてるなんて……」

想像しただけで気持ち悪くなり、新たな胃液と未消化の食べ物急上昇する。それもまた口の中に届く前に、ゴルデンシエルの舌に呑みこまれ、喰いつくされてしまふ。

「いいものを、腹走になつたぜ」

スルッ！ と熱い舌でゴルデンシエルの舌が引き抜かれた。マイティナースは自分の舌まづられて抜けるかと思われされる。

目の前で、ゴルデンシエルの舌をクチャクチャと動かして、舌に残る余韻を楽しんでいるかのような顔つきになった。それでも姿をわらず露骨はつきりと聞こえる。

「キスを味わったあとは、いよいよ新人ヒーローの身体を楽しませてもらふソ」

「あ、なに!?」

黄金の指につかまれているマイティナースの両腕に、異様な変化が伝わった。素肌に密着している十本の指と二つの手のひらの金属が溶けて、ヌメタルと肌の表面を伝っていく。まるで腕を溶けた黄金でコーティングされていくようだ。

金属が溶解するには温度が必要はすが、エイリアンゴールドの温度に変化はなかった。女たちが収監されている部屋の前で、両手両足をゴルデンシエルの溶けた金属に包まれたときにも、今にして思えば冷たいままだった。

溶けた黄金はゴールドシエルの意志を反映して動き、マイティナースの左右の半袖の内側にヌルヌルと溜りこんでくる

「ひいっ」

二の腕の裏側に、生まれてはじめて体験する胎動がどんと入る。未知の感覚に困惑して、気持ち悪いとも、気持ちいいとも、とまどっている間に会色の被膜が広がり、脇の下から胴体へ進む。左右の胸のふくらみを上っていく。

コートデシールの青い瞳に、歓喜の輝きが煌めいた。

「おおっ、感じるゾ! マイティナースはコスチュームの下にスポーツブラをつけてるのか!」

「ええっ！」
コスチュームは流奈と佳衣の合作による手作りだ。胸が揺れ動かないように、中に市販の白いスポーツブラを着用している。

「初々しくてそそられるナ。サンダークラブスのスターサンダーみたいなつしみのない女ヒーローはためタ」

皮膚を金属の薄膜で包まれていく感覚は、マイティナースが知る言葉では表せない。

胸が――、突突と、うた

それ以上口に出せない。すぐ目の前に立つ黄金の鳥。その甲冑の左右から覗く、自称騎士のティリノサウルスと半分人間の大蛇。体の爬虫類の悪党にじつと見つめられている。彼らに、スボッブラで押さえた左右のDカップが、冷たい感触に侵蝕されていくとは聞かせられない。

ゴールデンシエルの青い瞳が、唇を噛むマイティナースの餅を覗きこんでくる。

「そんなことまでわかる!？」

「ひっかつたナ」

「さすがのエイリアンゴールドも、そこまではわからないぜ。これでマイティナースは処女だとはつきりした。いよいよ楽しくなってきたやがっタ」

$$[\dots]^\wedge$$

りも繕こまっている乳首に、エイリアンゴールドが触れる。異常な緊迫のなかで鋭敏になった乳首が、金属にコーティングされる感覚を鮮明に伝えてきた。

乳首を征服した

胸にピクンと電流が走る

1100

反射的に背筋が伸びて、二スチニームの背中の方に壁にこすれ、ミニミニッと厚揚げが鳴る。

ではなく、くすぐったいような、心地よいような、不思議な感覚で胸を包みこまれている。

「あつ、あつ、父、ふんぬの？」

「大宇宙のエネルギーを蓄えているんだ。エイリアンゴールドがマイティナースの身体にエネルギーを注ぎこんで、神経を刺激している。日本がいうツボをやつたな、これをやられると、ババアでも、子供でも、どんな人でも、身体が痛いてたまらなくなて、もうちょっとエネルギーを吸ってやつて」

亀の口から舌が現れて、またマイティナースの唇をペロリと稀の枷を引きちぎらんばかりの勢いで、不自由な身体が踊りまわる

-- ♪♪♪♪♪ --

外からは見えなくとも、はつきりと自覚できた。今の今まで締めあがっていた自分の二つの乳房が、一瞬でいきり勃った。高さもちも増した女肉の突起に合わせて、黄金のコーティングの形も変化しているのだらう。そして乳房はただ直立しただけでなく、ズキズキと猛烈に疼いている。

「お、ほんま……ん」

(ア、アレのときと同じだ……)

誰にも聞こえない胸
アレとは、オナニー。

高校生のときに自分の身体を慰める快感を知ってから、あまりないことだが自然と身体が疼くことがある。身体が内側からむずむずして、特に乳首に小さな虫がまとまっているようにも感じて、自分の指で優しくさすって、そつとつまんで、加減をしながら転がして、疼きを解消した。もちろんそのときは胸だけでなく、下半身にもおすおすを指をしのはせて、優しく愛撫するのが常だ。

（あああ、いつものアレのと違ううも、何倍も疼いてる！ お

「おかしくなりそき

マイティカースが胸の中で告げるはずの言葉が、ゴールデンシエルの口から聞かされた

「嫌う、あんなにいいつー」

黄金の薄皮が露き、しこり効った肉筋を絞り上げられる乳首がつままれた。

胸の奥へと貫通した

「まあああ……」
未知の衝が収まるく、残ったのはよりいっそう苛烈になった乳首と乳房の疼き。忌まわしい宇宙意識は連続しては動かなかった。ただ妖しいツボを刺激するエネルギーだけを放出してくる。体験したこののない攻撃に負けたてられて、マイティオースはつい思ってしまう。

(もう一度)

と、願った自分を叱った

「なにを望んでいるの！　今は悪人にいたふられているのに！」
「もう一度、乳首をひねって欲しいんじゃないの？　遠慮はいらない」
「またちや戈尔デンシエルから自分の思考を先取りする言葉を書かれて、マイティナースは懸命に言い返した。」
「遠慮なんてしてない！」
「そうかい、それならエイリアンゴルドを先に進ませるぜ」

胸にこもっていた金の薄膜が、再び進撃を開始する。胸から四方へ広がり、背中の腹を包み、胴体全体を金色に染めていく。
「や、あ、そこはー」

下半身のスパッツ状のコスチュームの中に、白いスポーツショーツを穿いている。股間だけでなく、下腹部と臀部をしっかりと保持して防護する安心のデザインのはずだった。容赦なくショーツの内側に金属が侵入してくる。黄金の侵略者にへそを埋められて、下腹部の曲面を滑り落ちる。尻たぶを登られて、尻の谷間を流れ落ちていく。
「そこはー」

声には出せない部分に、エイリアンゴルドが到達した。恥丘を埋めつくされ、肛門に塞がれてしまう。
「ヤーン、完成したゾー」

「ゴルデンシエルが両手をマイティナースの腕から離した。マイティナースの身体を包む金属とゴルデンシエル本体が分かれるが、双方に変化はない。マイティナースの身体はコーティングされたままだ。」
「俺が作ってやったマイティナースの新コスチュームのお披露目だ！」

黄金の指に白いコスチュームをつかまれた。市販の生地で作ったお手製とはいえ、それなりに頑丈な布が一気に引き裂かれる。さらにスポーツブラとショーツを破られ、むしり取られた。
「あああー」

「全裸にされたー」

と、思った。実際にはマイティナースの身体には、失われた白いコスチュームとまったく同じ形の金色の薄膜がある。胴体をひとつたりと包装しているだけだが、両腕の二の腕までの半袖や、両脚の本腿のなかまではまでのスパッツまでそうくり再現されている。胸のふくらみには、燃える十字のマークまでが金属のわずかの厚みの差で表現してあった。

ジェントルマン・レックスが右手で、役に立っているとは思えない右目のモノクルの位置を直す仕度をした。
「何度見ても、ゴルデンシエル君のこの技は美しいものだね。美術作品として世間に公表できないのが、とても残念だよ。マイティナース嬢ももっとよく見たまえ」

いつの間にか部屋に入っていたおそろいの爬虫類コスチュームの下で、諸構成員が二人で、大きな楕円形の鏡を運んでくる。木製の精緻な装飾に飾られた高級品の姿だ。
鏡に映された自分の全身を見て、マイティナースは息を呑む。

白いコスチュームをコピしたエイリアンゴルドは、本物よりもはるかに薄く、肌に密着している。そのためにいつもはスポーティブラで隠しているDカップのふくらみが、今はきれいに現れた。
「なにより二つの乳球の先端でそり効つ乳首が、くっきりと目に入る。」
「あああ、この大きさはなに?」

生々しくも黄金に包めく勃起肉筒のサイズは、マイティナース自身の記憶にない大きさだ。オナニーのときに指で刺激して、最大限に膨張しても、これほど膨べ、太く、屹立したことはなかった。

あらわなのは胸だけではない。視線を下ければ、黄金の腹の良いへそが露んでいる。さらにその下！　金色の恥丘のふくらしたまるみの中に、縦に刻まれた肉筒の形状が突き出ている。まるで天才工芸作家が腕をふるった精緻な金細工のとき細細さだ。幸いにも覆われているのは恥丘の表面だけで、女性性器の内側には侵入してはいないと感じられた。

「恥ずかしいっ！　素肌は見えていないけど、こんなの、全裸でいるのと変わらないっ！」
胴体は金色の塗料によるボディペイントと同じ状態なのに、頭に載せた白いナースキャップと両足の白いブーツは残されているのが、ミスマッチなセクシーさを醸し出している。

ジェントルマン・レックスが鏡を持つ構成員を下がらせて言った。
「有名な映画で、全身に金粉を塗った女のダンサーが皮膚呼吸をできなくて死んだ場面があるが、あれは嘘なのだ。人間は皮膚呼吸をしていないから、マイティナース嬢も安心してその美しい衣装を楽しめよう」

その映画をマイティナースは知らなかったが、そもそも種族に耳を傾ける余裕などない。突然、手首と足首を拘束する金の鎖が、ひとりではどけたのだ。
「ああっー」

前置きもなく身体を解放されて、マイティナースはバランスを崩し、前のめりにカベットを敷いた床に倒れて、四つん這いになってしまつ。尻が持ち上がり、照明の光を浴びて、金色の二の尻たぶがキキラとまばゆい。
「自由になった。今ならー」

四つん這いの姿勢からカベットを蹴って、エシエントボイسنに跳びかかった。宇宙金属の亀やテイルノサウルス人間よりも、凄せて年寄りっぽい蛇人間なら、今のギアを上げられない自分でもなんとかならそう思う。
両手が、黒い縋に包まれた細い胴体に触れた。なんともいえないヌメヌメした不快な感覚が伝わる。

マイティナースの目の前で黒い蛇の頭が大きく口を開き、喉の奥から黒い煙が噴出した。顔が黒煙に包まれると、一瞬で気が遠くなり、その場にベタンとへたりこんでしまつ。

「気をつけよ、マイティナースススススス。われが加減をせねば、我が毒息で汝の顔を泥濘のこくへ溶かすのだよ」
「新人ヒーロー嬢、顔を上げろ。俺を見ろ」

頭上からゴルデンシエルの大声を浴びせられて、マイティナースの意識が覚醒する。今はまだ抵抗する力がないと悟ると、あわてて床に正座して、右腕で両方の乳房を押さえて、右手を下腹部に出した。
顔を上げる。目の前に「ゴルデンシエルの下半身があった。境界を埋めるのは、腹の甲羅から突き出る二本の太い脚の端。そこにはなにもない。ゴルデンシエルのそこは金色のツルンとした金属だった。」

「俺もこの世になって、亀に親近感を持つようになった。おかげで亀の生殖にもくわしくなったぞ。亀はしっぽに糞排出という穴がひとつだけあって、そこから小便も糞も出す。社はその穴の中にペニスを収納しているんだ。亀が勃起すると、仰天するほどかいペニスが外へ出て笑っちゃう」

「ゴルデンシエルの口が大きく開き、長い舌をヒョロヒョロさせて下品な笑い声を発した。『残念ながら俺のペニスは、本物の亀ほど立派じゃねえ。でも、いいモンは持っているぜ』」

「面胸の間の金属が盛り上がった。マイティナースは視線をはずせない。ついつい凝視する中で、みるみる金色の柱が伸び上がり、垂直にそそり物った。金色の柱の側面には血管を思わせる凹凸が走り、先端には独特のなめらかな形状のものが、マイティナースの顔に向けて突き出している。」

(二)これ、もしかして

「処女の小娘にはわからなえがもしれないが、こいつは形もサイズもリアルな人間の男の性器を再現してるぜ。まあ、多少は見栄を張って、エリアンゴールドと融合する前の俺のモノよりは大きくなってるがナ」

「ゴルデンシエルに看做された通り、マイティナースは男性器を見たことがない。幼いころには父親といっしょに風呂に入ったこともあったが、もう忘却の彼方だ。」

(これが、男の人の……こんなに大きい物なの！)

「ゴルデンシエルは自分で語った通り、黄金の男根は比較的大きいサイズだが、常軌を逸した巨大さではない。しかし男性器と初対面のマイティナースには驚異の巨大さに映った。」

(これほど大きいモノが、本当に女の身体の中に入るの！?)

「ファーストキスと同様に、男性との初体験にもうれし恥ずかしい理想をいだいていた。それは間違っても、はじめて見るペニスが金色の亀人間の股間から勃起する金属製というシチュエーションではない。」

「さあ、俺の亀頭を詰め口。黄金の亀の亀頭を詰めろンダ」

「自分では気のきいたことを言っただけなのだが、ゴルデンシエルが大笑いしている。マイティナースは顔を上げ、笑う亀の顔をにらみつけて、声を出さずにかるかる舌を左右に振った。フェラチオという性行為があることは、知識として知っている。自分がするところは想像したこともないが、愛し合う者同士の行為なら、正しい性のテクニックだと考えている。」

「強制されるなら、フェラチオは最悪の誘導行為だ。」

「普通の悪党なら、頭をつかんで無理やり口を咥えさせるところだろ。だが俺はボスと同じ紳士だからな。力すくはやらねえ。新人ヒーロー嬢が進んで咥えるまで待つてやれ」

「ゴルデンシエルの言葉とともに、マイティナースの二つの乳房に再び衝撃波が走った。胸を押さえつけていた右腕が跳ね上がる。閉ざしていた唇が開き、悲鳴がはびしる。」

「きゃひいっ」

(乳首を絞られてる！)

「顔を引きつけて自分の胸に目を向けると、もともと最大限に勃起している乳首が、さらにきつく引き伸ばされておしなれている。まるで透明人間の指で強くつままれて、割られているように見える。実際に動かしているのは、乳首を包む黄金の薄膜だ。ゴルデンシエルの肉体から分離しても、エリアンゴールドは本体の意志に従って動くようだ。」

「ひひひひひい！ ああううううう！」

「乳首が弄ばれただけでなく、前に伸ばされた乳房全体がブルブルと振動している。いや、振動させられている。」

「ああっ!!」

「また、ふいに黄金から与えられる力が消えた。乳房も乳首も本来の形を回復した速端に、激的な痛みが再燃する。」

「あつあつあつ!!」「こんなん！」

「右手だけでなく、無意識に股間を隠していた左手も持ち上がり、両手で左右の乳房を押さえてしまっ。そうすれば痛みを止められるが、せめて軽減できると思って。しかし自分の指先が乳首に触れると、その些細な刺激がより大きな逆響となって返ってきた。」

「ふあああつ!!、だめっ!!」

「普通の人間が火に触れたように、胸から手を離した。でも止まらない。一度着火がついた胸の灼熱な痛みは、どうなっても止まらない。」

「おっぱいの痛みを止めたかったら、俺のペニスをしゃべれ」

「いやー!!」

「マイティナースはひと言だけ言い放って、両手を正座する大鎧の中心に置いた。胸を隠したかったが、もう触れることができない。」

「新人でも、処女でも、さすがは立派なスーパーヒーローだナ。普通の女ならもう喜んで亀頭むしゃぶりついてるっ」

「ゴルデンシエルの女性全体を覆ひ言葉に、マイティナースの中に新たな怒りがぶつくと沸き上がる。」

「絶対にしない!!」

「その心意気はいいン、これでも我慢できるカッ」

「えっ!!」

「両手の下で、エリアンゴールドが震えた。秘密が左右に開かれ、内側にも金のコーティングが入りこんでくる。肉壁とクリトリスが宇宙金属に包まれ、宇宙のエネルギーが流しこまれた。」

「きつひいひいっ!!」

「新たな衝撃とともに、隣接が強烈に勃起させられて、きつくめられる。鮮烈な電撃のバズが女心から放たれ、背骨を貫き、全身を震憾させた。」

「そして乳首を震められたときと同じように、すぐクリトリスに加えられた力はなくなくなった。だが大きく膨張したまま放置された女の最も敏感な肉突起から、凄まじい痒みが発生する。」

「あひ、こんな、あつあつ……っんん……」

「左右の乳首と股間の隙がタイミングを合わせるように、ズキズキとリズムを刻んで、マイティナースを震めだてる。痛みが走るたびに全身がクワンクワンと跳ねて、正座した身体が前後左右に大きく揺れる。もう胸も股間も隠せず、両腕は無意識にヒョリヒョリと舞い跳った。」

「ああああ、おかしくなる！ このままだと、つらすぎて、つらすぎて、きが変になる！ もうー！ もうー！ 無駄なやせがまんはやせ、俺の亀頭を咥えれい!!」

疼きに翻弄されて、自然と視線が黄金の男根に向った。
（これを口ですれば……ゴールドシエルのは、本物の男の人のモノではないから……）
ブルッと唇を左右に揺る。

（だめ！ 井解してる！ 井解してしまかしてる！ あああ、でも、でも……）
首の動きが止まると、また喉が痒く亀頭に集中してしまう。

（……このまわわくなくなったら、反響ができなくなっちゃう……あああ、今は悪人の言いなりになっても正装を保つのが、スーパーヒーローの務めじゃないのかな……）
自分の思考が新たな言い訳に流れている、と気づいた。でもスーパーヒーローの務めという井解は、とてもすがりつきやすく、あまりに魅力に満ちている。

（……そう、そうだ、わたしはスーパーヒーローのマイティナースだから、正義のために、悪と闘うために、今は助をかいでもしかたないんだから……）
ゴールドシエルの思まわしい黄金ペニスを試めることは、スーパーヒーローの自己犠牲である、という結論ができあがる。乳首とクリトリスの熱い疼きでチャグチャに掻き乱された脳が編み出した甘美な結論にしがみついた。

（……これは正しいこと、そう、正しいことなんだから）
マイティナースは正座の両脚を動かして、ゴールドシエルの下半身へわずかにじりよった。

「んんっ！ よじれる！」
その動きだけで、エイリアンゴールドに支配された女性器がこすれて、ビリビリとびつない悲鳴を発する。

「はっあああ……」
「まず手で肉棒を固定し口」

相手の指示に従順にしたがい、両手を差し伸べる。抵抗することは、正義にらつて無意味だとみなした。どんな姿形をしていても、これが生まれはじめて男のモノに触れる初体験だ。猛々しい疼きに急き立てられながらも、おすおすと指を垂直にそびえる金色の幹に触れさせる。

やはり冷たい、氷のように冷えてはいないが、人間の体温より低い温度が指に伝わってくる。人間の皮膚や筋肉とは異なる不思議な差がさもある。こんな状況でなければ好奇心を持てたかもしれない。

男根を握っても、急所の疼きは止まらない。苛まれながら指先に力をこめて肉幹を手前へ引くと、抵抗がありながらも亀頭がマイティナースのほうへ向く。

黄金の亀頭にそそそと顔を近づけて、舌を出した。なせだか、舌をつけるキスよりも舌をつけるほうが、まだましな気がした。

舌先が、亀頭に当たる。嫌悪感でめきめきあかれる。

「ううん……」

味はしなかった。黄金の舌と同じように、やはり金属は金属だ。

舌をつけたが、これからどうしていいのかわからなかった。フエラチオについてほんやりしたイメシしかない。肉幹を両手でつかんで、亀頭に舌を当てたまま、まだやまない疼きに身体をくねらせる。胴体を包む黄金がキラキラと輝いた。

「唾をたぐりりと垂らして、亀頭を濡らせ。そして口の中に入れ口」

「んん……」

自分の唾液を他人に見られるという経験もはじめて、口から出した唾が亀頭の表面を流れて、肉幹を伝わり、自分の指を濡らした。

口をせいつばい大きく開き、舌をゆるく亀頭に添わせる。最後の抵抗でこのまま最大限の炎を吐くこと試みたが、やはり火は口口りとも出せない。しかたなく顔を沈め、亀頭を口の中に入れた。

「ううん、んん……」

（気持ち悪い！）

また口内が黄金の宇宙空間でいつぱいになる、と思つた途端に、爆発が起こった。猛烈な水圧で喉の奥を突かれて、一瞬で口から喉まで下口口の粘液で埋められる。強烈な生臭い味が舌と喉を痺れさせ、生臭い匂いが鼻腔から肺まで染みこんだ。

「ぶあつ……」

反射的に口から亀頭と粘液を吐き出した。外に出た亀頭の先端の穴から白い水気が噴き出しつつ、マイティナースは顔に浴びせられる。顔から鼻筋、口から喉の先まで、大量の白い粘液でヌヌヌと被われた。さらに顔だけでなく、踵につけたナースキャップも、髪の毛も、白い汚泥に汚れる。ゴールドシエルの分身である金のコスチュームの胸すら、白く塗りつぶされていた。

人間の胴體よりもはるかに多い精液をマイティナースにぶっかけつつながら、ゴールドシエルが悪笑いをしている。

「ひやはははははハ！ 罵いたか！ はははは、精液も金色だと思つただろう。こいつは本物の嫌嫌の精液だぜ。エイリアンゴールドに融合してからやたらと大量に出るようになったん……」

黄金亀の悪笑も、マイティナースの耳には入っていない。両手で顔や髪から白い汚泥をぬぐい取るとジタバタもがいている。悲鳴をこらえているのは、口を開けば嫌嫌の汚物が入ってくるからだ。

「ひいひいひいっ！ 汚い！ 汚い汚いっ！ 身体中が汚いひいひいっ！」

身体の内外を汚染されてもがき苦しむマイティナースの姿を見下ろして、ゴールドシエルが悪笑いを囁かせつつける。ジェントルマン・レックスはまたモノクルをいじり、大きな口の端に笑みを浮かべて、希少な貴重品を盗るような態度で新人ヒーローをながめる。エンジェントポインは細い右手で蛇の踵の下髪をなでて、まるで薬品を注入した実験動物を観察する冷静な科学者の態度だ。

マイティナースは顔の大部分はぬぐえたが、まだ髪や胸に精液が貼り付いている。だがもうきれいにすることはできなかった。両腕をゴールドシエルの手につかまれ、カマかせにカーベットに四つん這いにされてしまふ。

さらに黄金にコーティングされた尻をつかまれて、二体の脱出組役人に向かって掲げるポーズを強制された。女性ヒーローの丸い尻から反射した光が、ゴールドシエルの上と下の亀頭にぶつかって照り返す。

尻たぶが左右に割り分けられて、金色に輝く肛門と女性器がさらけ出された。

「いやああっ……」
これから起きることを想像して、マイティナースは必死に手足をばたつかせて逃れようとする。だが尻を包むエイリアンゴールドとゴールドシエルの指が再融合したのか、離れられない。

「新人ヒーローマイティナースのオマの口を見せてもらいませ」

下卑た言葉尻に治ひせられることに、肉體を指でつまめる感覚が伝わり、マイティナースの背筋が凍りついた。三人の男、や二匹の怪物に、女の秘密をあますところなく見られている。敏感な結核に突き刺さる指線を感じるのは、脳が生んだ妄想だった。

女の花園が広げられる。すでにクリトリスも肉體も金色になっているが、中心の膣口だけはきれいな橙色のまま。苛烈な疼きに震えめられて、じっとりと濡れて、黄金とは異なる埋めきを発している。それでいてそやかにすぼまり、未踏の秘密を護ろうとした。

「男を知らない穴は、いつ見てもわくわくするナ。いよいよスーパーヒーローの処女をもらっせ」

「やめて！ 絶対にいやっ！」

「俺は宇宙ネルキを使つて、マイティナースに快感を味わわせてやれル。処女を奪われながら、肉の悦びに酔いたいカ？」

返える余裕など、今のマイティナースにはありえない。黄金の隣者は静かに話を進めていく。

「だが、せつかくの処女喪失分。ちゃんと痛いほうが記念になるだろう」

「いやああああ、きゅっ……」

喉がつまった。声も思ひ、そして炎も出ない。

黄金の中心ですぼまっていた膣口に、宇宙製の亀頭が押しつけられるのを感じた。自分では見えないうちこそ、いつそう鋭く感じ取つてしまふ。遠慮も容赦もなく強引に押し広げられ、膣内に突進してくる。マイティナースの尻に、ゴールドンシエルの腹の甲羅がぶつかった。

すべてほんの一瞬。

一瞬で、処女の肉体が感覚に支配された。

激痛が、全身を貫通していた。エイランゴールドは低温なのに、赤熱した鉄杭を胴体の中心に打ちこまれているようだ。

「……ああ、ううう、ひきつ……」

体内で市々とした熱い異物が引き抜かれた。羞らかい結核が引き裂かれるようにすりたてられ、新たな苦痛が荒れ狂つ、衝撃で開いた喉から、絶望の苦鳴が噴き上がる。

「きあああああ！ あきひいいいいいっ！」

後退する肉野の黄金が、犯罪者が女性スーパーヒーローの処女を盗難した罪悪である赤い鮮血でべったりと濡れている。広がった膣口からあふれた血溜が、腐蝕なカーベットを濃赤に染めていく。

「この血を見るのが、俺の最高の悦びだ！ 処女を盗難するのは人生で一番の出来事だ！ 死ぬ間になつてもやめられないほど気持ちいいぜ！」

ゴールドンシエルの腹の甲羅が再びマイティナースの尻に叩きつけられ、新たな血がどろりとあふれて、金色の脚を赤く濡らす。

「はきいいいっ！ あくううう……」

悲鳴を連続させるマイティナースの腹に、背後からゴールドンシエルの両腕がまわされた。床を向いた左右の乳房がしりしりと揺られて、乳房が下方へ振り出される。

「あつ、あああああ……」

四つん這いの手足がカーベットから離れて、身体がふわりと浮き上がった。黄金肉棒を根元まで膣に埋め込まれたまま、胸を握り絞めるゴールドンシエルの腕力で持ち上げられたのだ。

身体の中で亀頭の角度が変化して、激しくかきまわされる。ゴールドンシエルとの体格差のために、マイティナースの両足が宙に浮き、自身の体重がかかつて、さらに深く男根が突き刺さり、新たな痛みが吹きさらす。

「ひきいいいっ！ い……」

マイティナースの悲鳴がひときり高くなり、また痛み消えた。口だけが陸に上げられた魚のようにバクバクと開閉して、舌が舌しげにのたつ。

乳房を握るゴールドンシエルの両手が、胸を被りエイランゴールドに融合した。マイティナースの胴体を包む宇宙黄金のコスチュームが波打ち、胸も、腹も、背中も、太腿も、うねうねグニグニと揉みたてられる。人間の手では絶対に不可能な異次元の愛撫で全身を犯される。

処女乳を揉まれられている貴族最中のマイティナースには、すべての愛撫が激痛を増幅させる苦め苦めではない。このまま背中と尻を密着させているゴールドンシエルの甲羅に呑みこまれて、文字通りの蹄形もなく消化されてしまふのではないか、という想像までもが脳裡の奥に走る。

「いやああ、助けて！」

スーパーヒーローにあるまじき言葉を、犯罪者の前で吐いてしまった。もう恥も屈辱もない。死への恐怖がマイティナースを支配している。

「消えたくない！ 死にたくない！ いやあつ、助けてええっ！ くおおおっ！」

乳首とクリトリスが引き伸ばされ、両脚が激しく跳ねた。下手くそな人形使いに操られるマリオネットのように、手足が勝手に踊る。すべての動作が、マイティナース本人に苦痛となって返ってきた。

「はくくうううう！ 殺さないで！ 死にたくないいいい、いやあああつ……」

マイティナースの涙を叫びを、ゴールドンシエルが舌なめずりして味わう。処女の狭い産道に締めつけ以上に、スーパーヒーローの死への恐怖と苦悶の反応を快楽としている。

「いよいよ俺の精液を、膣の中になつたりと一胞走してやるゾ！ 膣が多すぎて、子宮が破裂するかもしれないナ」

「ひいっ……」

マイティナースは本意として、ゴールドンシエルの抱擁から恐れようと足掻く。しかし膣だけでなく、恐れていた通りに背中と尻が甲羅に密着し、肉體がベニスのかかと結合して、完全に動きを封じられていた。

「だめえっ！ 殺されるうううっ……」

「喉らエッ……」

「ああああああああああああああああああ」

膣内で巨大な噴火が起こった。喉を突いた射撃よりもはるかに莫大な力が女体を貫く。

「ああああああああああああああああああ」

「ああああああああああああああああああ」

「ああああああああああああああああああ」

「ああああああああああああああああああ」

「ああああああああああああああああああ」

「ああああああああああああああああああ」

「ああああああああああああああああああ」

「ああああああああああああああああああ」

「ああああああああああああああああああ」

「ああああああああああああああああああ」

「ああああああああああああああああああ」

「ああああああああああああああああああ」

「ああああああああああああああああああ」

「ああああああああああああああああああ」

「ああああああああああああああああああ」

「ああああああああああああああああああ」

自分が失われるという恐怖が一気に増幅され、マイティナースの脳を深い暗黒に染めた。自分の体内にそがれている熱い奔流が、量が異常に多い人間の精液だとしても、邪悪な怪物に汚染されたことには変わりない。
「あああああああああ……」
恐怖にがんじがらめにされて、マイティナースは深い闇の中へ墜落していった。



第四章 古き蛇の轟く淫魔術

壁の中から魔眼が浮上する。

まぶたを開くと、高い天井が目に入った。

石造りの天井だ。木製のシャンデリアが下がっているが、よく見ると電灯ではなく、多数の蠟燭が立っ塊だった。

はっとしてマイティナースは起き上がり、自分の身体がまだ存在することを確認する。あゝままだエイリアン・ゴーストに吸収されると思っただけ、とやうに無事に分かれたようだ。

「生きてる……ああ、生きてる！ よかった！ 生きていられた！」

人生で最大の安堵の息をついてから、あらためて不思議なことに気づいた。

胴体をコーティングしていた金色の偽コスチュームはなくなり、かわりに縫られたはずの白いコスチュームを着ている。よく見ると、自分と怪人の手作りだったコスチュームよりも、作りが上だ。布の肌触りも前より心地よい。

しかも本物より布が薄く、伸縮性が強くて、肌に密着する。さらに本来はコスチュームの中に着ているスポーツブラとスポーツショーツがない。そのために露こまった乳首のささやかな突起や、羞らしいへそのくぼみが、くっきりと浮かんでいる。身体を曲げて左胸を開けば、恥丘のふくらみに走る秘曲の線が溝まで、白い布の表面に刻まれている。

「いかげな。僕が複製させたマイティナース嬢のコスチュームの着心地は、レプティルボールの総力を結集したプレゼントだよ」

室内にジェントルマン・レックスの音が響いた。今の姿を見られていると思う、両手で胸と下腹部を隠す。

「僕たち犯罪者にとってスパーヒーローは真剣に殺してやりたいと願う敵であるけれども、同時に僕は紳士としてスパーヒーローに敬意をいだいている。マイティナース嬢のコスチュームを再現して着せたのも、敬意の表れだと理解してくれたまえ」

ジェントルマン・レックスが自慢げに語る気取った言葉は、マイティナースにはさっぱり理解できない駄言だった。無視して見まわすと、失神する前までいた部屋よりも広い。英国貴族の御屋敷の立派な部屋に比べると、対照的な魔様な空間だった。

床も、壁も、天井も、岩でできている。巨大な岩の内部をくりぬいたのが、それとも石材を巧みに組み合わせて、岩盤に見せかけているのか。マイティナースにはわからない。カメラやスピーカーも見当たらないが、ジェントルマン・レックスの言葉から考えて今も観察しているのだろう。

岩壁には大きな壁面が描いてある。大蛇の群れた、様々なデザインの大蛇がからみ合い、巻きつき合う。プリミティブな筆致だが、不気味な迫力で気圧される。

そしてこの岩壁からは、平面の絵ではなく、巨大な蛇の石像が突き出ていた。ひとつの太い胴体から九本の脚が伸びている奇怪な大蛇だ。

神殿、という言葉を自然と頭に浮かぶ。

蛇の神を崇める神殿。慈悲や愛といったものはまったく感じさせないが、神秘と荘厳さはひしひしと感ずる。この異様な神殿は、当然ながらひとりの怪物的犯罪者にびつたりだ。

「あー」

多数の蠟燭の光が作るマイティナースの影が、岩床の上で揺らめいた。直後に影の中から蛇と人間の混合物がスルスルと這い出てくる。

「あああッ」

エンシェントボイスンの姿を目にした途端、マイティナースの全身にゴールデンマシエルに塗布された恐怖と苦痛が湧き上がり、自分の影から逃げるように跳び退る。

長い蛇体を床の上でぐるぐると巻いた魔道師が、黄色い眼でぼろろとスパーヒーローを追いか、しわがれた声を悠然と向けた。

「マイティナーススススススス。我が神殿へようこそ」

マイティナースは蛇怪人から離れた二つの壁際まで走り、両手で岩の表面を何度も叩いた。あいかわらずギアを上げることはできず、女子大生の腕力では岩壁がビクともしない。炎も吐けない。懸命に視線をめぐらせ、指先で表面を探っても、出入口口はどこにも見つけられない。

マイティナースのあわてふためく姿を、縦長の蛇の瞳が興味深そうに見つめる。

「マイティナーススススススススが気絶している間に、我が魔術によって記憶を覆写した。スススススス捨てて子であつたとはな。実の両親は今もわからぬまま、捨てた両親は」

見えないうスリーカーから再びジェントルマン・レックスの音が響いた。

「無粋なことはやめたまえ。なにことも解き明かすにはいられない探究者であるエンシェントボイスン君の性分はわかるがね。スパーヒーローとスパーウィランはかりそめの名前と姿で舞つこそ華だ。正体だの本たのは野暮の極みだよ」

エンシェントボイスンが反論もなく、話題を変えた。

「ゴールデンシエルのお遊びの後には、マイティナーススススススにレプティルボールの業務に協力してもらおう。ゴールデンシエルはただの用心棒。悪犬なら偽善鬼にスススススすぎない。レプティルボールはジェントルマン・レックスススススススが資金を出し、我が魔道によって業務を行っている。このように」

今度はエンシェントボイスンのとくさを巻く影が揺らめいた。

水面の下から顔を出すように、影の中からいくつもの女の顔が浮かき上がった。

（産の中にいた人たち）

驚くマイティナースを、女たちの美しくも呆けた表情が見つめているように感じた。無表情なのに、視線には強烈な妖異なものがこめられていて、コスチュームを通して奥肌まで伝わってきた。

影の中から現れた女たちは、全員で六人。産の中と同じく一米まわぬ全裸で、横一列に並び、エンシェントボイスンに向けてそろって顔を揺れる。

「マイティナースススススススよ、見るがよい。我が魔道の精進にして、レプティルボールが産の世界に供給する商品で、愛しき蛇の母たちよ、仕度ススススススするのじゃ」

六人の女たちがきれいなハモニーで答えた。

「エンシェントボイスン様のお望みのままになることが、わたしたちの心証よりの歎ひです」

六人が裸の尻を床につけた。両手を背後の床につけ、四肢を突っ張って、腰を浮かせる。そして両脚を大きく開いた。全員がいわゆるM字開脚のポーズになり、空中に浮かせた股間の中心を黒蛇の尿道師へ向かって突き出す姿勢で固まる。

かなり無理のある体勢なので、六人ともに全身をプルプルと震わせながら、あからさまなポーズを維持しているのが、マイティナースの目には痛々しく映った。

「汝らの同胞となる歡びを待つマイティナースススススに、聖なる産卵を見せるのじゃ」

「お望みのままに」

同時に告える女たちの恥丘がポツリとふくらんだ。まるで内割からなかに押されているようだ。内割にあるもの影鬱なのか、女たちの下半身がカクカクと上下に揺れはじめる。

「もしがして大人ののおもちゃを入れられてる!」

実際に触ったことも見たこともないが、如願としてだけ腫にあるものを感じた。ついこの間まで普通人として生活してきた、オフビートの社会に關わってこなかった女子大生に推測できるのは、そのレベルの興奮でしかない。

「あああああ!」

「おおおおお!」

「はうっつ!」

恥丘をふくらませた女たちが、口々に低く声を上上げはじめる。マイティナースの耳でもそれらの声音が苦痛ではなく、快感を表現しているの判別できた。ついさっき異常な強姦をされて、処女処女の激痛を味わったばかりの身でも、聞いているだけで妖しい気分になってしまふ。

女たちが下半身を上下に動かすだけでなく、滴を掻くように腰をくねらせはじめ、声が露骨に悦楽を訴えだした。

「おおっ、いっつ!」

「気持ちいいっ!」

「たまらなひい!」

恥丘の中心で、肉瘤がひとりで広がる。見えたのは、桜色の女の秘密の肉ではない、

「な、なに!」

マイティナースは自分の体内がふへふする怪妙な光景に見入ってしまった。さらに大きな嬌声が高い高聲に反響する。

「産みますッ!」

「産むっん!」

「産卵させていただきますッ!」

「産卵でき、幸せ!」

そして同じ言葉の合唱が、神殿を揺るがした。壁面の大蛇たちで、九頭の蛇の神像も、女たちが捧げる濡れそぼった如神に合わせて揺らめいているようだ。

「イクッ!」

「イクッ!」

「イクッ!」

「イクッ!」

「イクッ!」

「イクッ!」

「イクッ!」

「イクッ!」

「イクッ!」

「イクッ!」

「イクッ!」

「イクッ!」

「イクッ!」

「イクッ!」

「イクッ!」

「イクッ!」

「イクッ!」

「イクッ!」

「イクッ!」

「イクッ!」

「イクッ!」

「イクッ!」

「イクッ!」

「イクッ!」

「イクッ!」

「イクッ!」

六人の股口が引き裂けさらに広がり、プッシュプッシュと凝液を噴出して、次々と卵を産み落とす。女たちの健康的な美しいフロロイションに収まるのは不可能な量の卵が、女性器から続々と出てくる光景は、おそましく知らなマシクショーにも見える。

たちまち浴床の上に女體の水たまりが広がり、卵が大體に転がった。卵が終々と轉化して、黒い子蛇の群れが重なり合つて這いまわっている。

連続産卵絶頂を終える、女たちの手足が脱力して、床に横たわった。六人がともに満足しきつた笑みで、美貌を輝かせている。大きな乳房を波打たせ、腰を激しく上下させ、四肢をクランピフンと痙攣させた。

エンシエントボイスンの口から甲高く不快な音のうなる音が出る、マイティナースにたらうとしていた子蛇たちがいつせいに向きを変えて這い進んだ。とろろを巻く蛇体がから伸びる影に触れると、水に沈むように影の中に消えていく。

ついで六人の女たちも四つん這いで床を進む、自分が産んだ子供たちの後を追つて影の中へと姿を消した。

再び広い苔の蛇襖殿には、割れた卵の殻以外はマイティナースとエンシエントボイスンだけになる。

「今よりマイティナースが蛇の母になる術術をススススススス」

今まで老人らしい声に似合うゆるゆるとした動きだったエンシエントボイスンが、一瞬でとろろをほじいた。押しつぶされた八木が大きく跳ねるように、伸びた蛇体が床の表面を猛烈な速度で滑り、マイティナースに迫る。

「きゃあああ！」

マイティナースはやみくもに両手を振りまわす。しかしエンシエントボイスンの黒い身体がタルタルと巧みに腕をかくぐり、背後にまわられた。両脇の下から、黒い線に絞られた両腕を押し入れられる。エンシエントボイスンの腕は形こそ人間と同じだが、関節を無視して、蛇の胴体さながらにマイティナースの両腕に巻きつく。

「ゴルデンシエルの黄金の宇宙金屬の肌触りこそまた違う、爬虫類の冷たくヌメヌメした鱗の感触が、背筋を凍えさせた。右の耳も、人間の耳と同じサイズの蛇の頭が口を開き、二つの細い舌で首筋をチクチクと舐められる。黒肌が立つた。

「我が姫君のキスススススススを受けるがよい」

大蛇の頭が前に迫り出し、マイティナースの右肩を越えて、顔の前へまわった。くしゃりと舌が反転し、二つの舌先でコスチュームに浮かぶ乳首の突起をつかれる。

「ひい！」

マイティナースは奇怪な主の愛撫から逃れようとがくがく、両腕に巻きつく黒い腕の腕を振りほどけない。さらに両脇にもエンシエントボイスンの蛇体が巻きつき、動かせなくされていた。古典文学の研究で、貞節な淑女が邪惡の象徴である蛇に巻かれて誘惑されるヨロツバの古い絵をいくつも見たが、自分がその絵を再現するときくるとは信じられない。

舌を巻かせながら、上顎の二本の牙が立ち上がった。コスチュームの右胸のふくらみに、一本の牙が立てられる。鋭い牙の先端が白布を貫通して、乳房の肌に突き刺さった。チクリとする痛み、マイティナースはたまらず悲鳴を上げる。

「きゃううううう！」

エンシエントボイスンの上顎の牙が、容赦なく根元まで胸の中に入された。右の乳房の中で、二本の牙の先から冷たい液体が流れ出るのを感じる。

「おつ、おあああああああ……」

「ゴルデンシエルのエイリアンゴルドは、身体の表面に密着しただけだった。エンシエントボイスンの毒は体内を侵襲している。異質な物質が流れて、右腕から腕体へ向かつて血管が冷えていくのがわかる。

乳房から牙が引き抜かれた。

「あううう！」

間を置かず、左の乳房に牙が突き入れられる。左腕にも毒が注入され、新たな冷感が腕体にどくどくと染みこんでいく。エンシエントボイスンが牙を抜く、冷える。ミシミシと胸が冷えていく。左右の乳房の先まで冷える。

そして動った。冷たく凍えながら、二つの乳房が熱に充ちられているように動する。エイリアンゴルドに乳首責めを受けたときのうなだにりする疼きはないが、自分の胸が侵襲され、汚染されているのは間違いない。

二つの白い突起のすぐ前、蛇の頭が観察するよう上下左右に角度を変えて揺らめく。じつと自分の毒の効果を見つめる黄色い眼球。そこに浮かぶ長い瞳に、あらためてはつきりと知性がうかがえて、マイティナースは身体だけでなく魂が凍てつく思いがした。

エンシエントボイスンの頭が、マイティナースの胸の真ん中を滑り降りた。へそを超えて、上顎の牙が立ち上がる。

「まさかっ！」

毒蛇の次の狙いを予感して、マイティナースが悲鳴を上げる。

コスチュームに浮かぶ動点のまわり、その中心に走る縦溝の左右に、牙が付け根まで刺さった。

「あきいいいいっ！ 冷たいいいいっ！」

痛みよりも冷たさが勝った。牙が抜かれると、氷にひびが走るように「コスチュームに浮かぶ縦溝がひとりでに開いていく。

「我が姫君は止しく効果をあけてある。されば術師の第二階梯にスススススス進む」

エンシエントボイスンの蛇の頭が再び持ち上がり、マイティナースの踵を正面から覗きこんだ。

「これ以上、なにをするつもりなの？」

「我が魔法の杖を味わわせようぞ」

マイティナースの両腕から黒い腕がほどけた。さらに両脚を縛る蛇体がほどける勢いで、身体が独掌のよう^{ひとてま}に回転させられる。

「あっ！」

そのまま背中から床に倒される。ちょうどエンシエントボイスンの影の上に、尻と背中をつさせられた。すぐ左の影の中から大體の黒い蛇がうじゃうじゃと鎌首をもたげて、マイティナースの手足に巻きつく。両脚を左右に引っぱられた。

マイティナースは太腿をM字開脚させられたポーズで、身体を固定されてしまう。ついでさき蛇の卵を産んだ女たちと同じ姿勢だ。開いた脚の間に、エンシエントボイスンの蛇体が這い進んできた。そのまのしかりはしないで、一度止まって、自分の異様な姿を暗示するがごとく、高く伸びあがった。

見上げるマイティナースの目に、エンシエントボイスンの肉体的変化が映る。蛇体の腹の部分の横溝のある鱗と腕の間から、左右一本の棒状のものが現れ、そそり動った。

その色は黒い。しかし先端にいくつと亀頭をはじめて、全体の形状は二本とも人間の男性器そのもの。長さも太さもマイティナースが唯一肉眼で見た「ゴルデンシエルの逸物」^{エスケイプ}と同じくらい。

蛇やトカゲのオスには、半陰莖。英語ではヘミパニスと呼ばれる二本の性器があるという知識を、マイティナースは持っていた。持っていたなんの助けにもならない。

マイティナースは趣味として、大学の研究として、古典文学とその研究書を読み漁ったおかげで、セックスを利用する伝統的な魔術や神秘思想が西洋にも東洋にも存在したことを知っていた。誤解を受けがちなが、それ自体は邪悪なものではない。西洋の性魔術においては、術者のペニスを魔術師の象徴である杖に見立てることも知っている。

友人たちの間で雑学女子と呼ばれるマリアックは知識も、やはり現実の魔術者を前にしてなんの力もない。

エンセントホーゲンが双頭の黒いペニスを先鋒にして、マイティナースにのしかかってくる。

「いやっ、来ないで！」

新人ヒーローは白いコスチュームの胴体をよじるが、手足を縛る蛇の群れは床に固定されて動かせない。

しかし、またマイティナースの前で蛇の魔術師の動きが停止した。恋愛映画の恋人たちなら夕日の中で見つめ合っている距離で、黒い蛇と人間が融合した肉体が静止する。

肉体の一部だけは露いた。二本の黒い肉棒が長さを伸ばしている。太さは変わらないが、長さは一メートル近くになり、亀頭をたがえてクネクネと左右にくねる。有名なインドの蛇使いが語らせたユラのようだ。つまりこの亀頭に目や口がないのが、かえって不思議に感じる。

暗黒のペニスがひとしきり踊った後に、二つの亀頭がマイティナースの上半身に迫ってくる。コスチュームのDカップの胸の先端に、亀頭がちょこんと触れて、また離れた。

それだけでコスチュームの薄い布に、溶けるように小さな穴が開いた。エンセントホーゲンの魔力のなせる業なのか、それとも敵が作ったコスチュームがそういう仕組になっていたのか、二つの穴から魔霧がよって強制的に屹立させられた乳首と乳輪周辺だけが現れる。

コスチュームを大きく破られてバストを全開させられるよりも、乳房の先端だけを外に露出させられる等は、自分自身の目にもひどく卑猥に映った。

（こんなに大きくなくてもいい）

コスチュームの上から勃起しているのはわかっていたが、素肌の肉筒を目の当たりにすると、いっそう大きく膨張していると感じる。

黒い男根が同時に動いた。左右の乳首に亀頭が押しつけられ、指先で腰をうづみ強くすりたてられる。

「ひあああー はっはっはっはっ！」

それだけで胸全体が湧くような快感が炸裂した。押しつけられる亀頭が冷たく、乳首と乳房の内側は冷えたままなのに、神経に熱いパルスが走り、脳の快感中枢が沸騰する。恥ずかしい屈辱の言葉を聞かされたくないと考える前に、マイティナースは口走っていた。

「気持ちいい！ 乳首が気持ちいいのっ！」

自分の歓声を聞いて、はじめて自分が恥知らずなことを大声で発しているを知った。知っても口を閉じることはできず、後から後から喉の中を響きの言葉が噴き上がってくる。

「はひひひいんー 乳首がー 乳首が滑けちゃっ！ 気持ちよく滑るっ！」

高くこり動いているシククの肉筒が、亀頭に圧迫されて倒される。さらに押し手が強くなり、乳首が乳肉に埋められる。Dカップの乳房全体がひしゃげて、二つのカルテラが並んだようになつた。

「ああんっ！」

亀頭の押し手がゆるむと、乳首は自らの勃起力を乾かすくぼんだ乳房も形をもどした。しかしまた乳首に圧力を加えられて、今度は別の方向に押し倒される。また胸がへこまされた。

「はひひいっ！」

乳首が亀頭に押し倒され、動ち上がられ、また別方向に倒される異常すぎる愛撫が連続する。圧迫された乳肉も経緯無限に形を変えられ、上下左右に倒れるたびに、二つの湧える肉筒からあふれる乳液の電撃が大きくなり、対照的に脳がクワツと泡立つ。

今にも乳首が耳から、何かいやらしいものがあふれ出そうなおかしな気がしてならぬ。

「滑ける！ 滑ける！ あっはああ、気持ちよすぎるっうん！ あああ、まさか、このまま胸だけでイッチャーのっ！」

回数はいくつか、自慰でイクという感覚は知っている。イクという簡便な表現は、高校生のときに友人の会話でなんとなく知った。しかし胸を愛撫するだけでイクた経験はなかった。いつもはクリトリスをそっとこすりつけて絶頂を迎えていたのだ。友人たちとの女だけのおしゃべりでも、胸だけでイクたという話は出たことがない。

「あひひひい！ ありえない！ 胸を愛められてるだけなのに！ あっ、あっおおおっ！ イヤ！ ダメッ！ 絶対にあるはずが、おっおおおおおー おおおおお、イクッ！」

目の前に蛇の顔がある。細い瞳が心を貫通がすまに見つめてくる。それがわかっていてもエクスタシーを幾々と訴える言葉を止められない。

「ひひひい、胸でえっ、ああっ、乳首でイッチャーううううううーッ！」

マイティナースの叫び声に満足したように、二つの亀頭が胸から離れる。解放された乳首がまた高く動ち上がり、絶頂前と変わらない威容を示す。押しつぶされていた乳肉も、自由になった反動で大きく弾み、元のDカップを回復する。最後の動きがまた新たな興奮を生み、絶頂の後押しをした。

「はっはっはっ！ イクっ！」

叫んだままたしなく開いた唇の端から、ぐとぐと涎が垂れた。唾液が白いコスチュームの胸に染みこみ、あんな模様を描く。胸を犯していた黒い男根の一本が、マイティナースの下半身へと滑った。股間に入った亀頭がコスチュームに触れると、また穴が開き、その内側にあるものを外気にさらす。

スーパーヒーローの肛門だ。

可憐にして繊細な顔が、中心から放射状に広がって、愛らしい花の雲に見える。

「れっ、れはダメッ！」

肛門性交についての知識はある。同意の上なら悪いことだとは思っていない。しかし自分が肛門に異物を受け入れるなど、イメージすらしたこともなかった。今度こそ準備な辱めから逃れようと思えるが、手足の生きた拘束がスルスルと露くばかりで、どうにもできない。

すばまたままの肛門に、黒い亀頭の先端が押しつけられた。またマイティナースは何度も感じたことを口にしてしまっ。「冷たいっ！」

毒に冷やされた局部に触れる男根は、より温度が低い。通常の性行為の燃える情熱とは正反対だ。強くすばまり、懸命に抵抗する肛門が強引に押し広げられて、スプリングス蛇の凶器を打ちこまれる。

苦痛を予感していた。本来排泄のためだけの肛の器官に、無理やりに太く長いモノを突き入れられるのだ。痛いのが当然のはず。

「きやおおおおううー」

絶叫は新たな苦痛の表明ではない。はじめて経験される肛門が、強烈な快感を次々と暴発させている。

「そ、そんな!! はっあああ、てして」

予期せぬ快感と、快感ゆえの體操に引きつるマイティナースの顔を、二又の舌がチロチロと舐めまわす。黄色い眼球が傲慢な視線を向けてくる。

「気持ちよくてたまらぬであろう。我が毒薬が、マイティナーススススススの感覚を造り替えたのじゃ。もはや、胸で、前の穴も、後ろの穴も、なにをされても肉の悦楽に酔い痴れるのみと知れ」

「そんな。あ、あああ、」

尻の中に亀頭を挿入した奥根が、蛇行してヌルヌルと進み、奥へと入っていく。妖しい猛毒で快感の発生器官にされた腸の粘膜を、右に左にねわって刺激されると、ビリビリとめくるめく火花が咲いた。

「ひっ、ひいっ! お尻っ! はおっ! お尻があつ!」

「尻がよいが、尻がよくてたまらぬが、マイティナースススススススよ、お尻を口が眼でしかと見るのじゃ! 己が尻で、我が魔法の杖を呑んでおることを」

マイティナースは腕の手で頭をつかまれ、ぐいとつむかされた。角度的に黒いペニスを吞まされる肛門を直接見ることはできないが、蛇行する肉群がスズツと進み、自分の下半身の中に消えていくのがはつきりとわかる。その姿は男性器ではなく、獲物を呑む蛇そのもの。

「蛇が!」

マイティナースはわめいた。恐ろしすぎる光景に脳が痺れて、わめがずにはいられない。

「蛇が、わたしのお尻の中に入ってる! 入ってる! あっあああ!」

恐怖の叫びは、すぐに雑音へと変化してしまふ。蛇奥根がうなつて進むたびに、甘美な濡れが尻の中から背筋へと駆け上り、乳首の頂で沸いた脳をまたクラクラと泡立たせる。

「いかに蛇に恐怖しようとも、いかに己が身を呪わしく感じようとも、尻から湧く快びにはけつして勝てぬ、ススススススパーヒーローといえども、われが与える魔道は快感には抗えぬのじゃ」

チロチロと語る舌と口と吐かれる言葉は、マイティナースの身も心も縛り、鈍む呪詛に他ならない。ひと言ひと言が愉悅を強くしていく。

「いよいよじゃ。マイティナースススススススが聖なる母になるための我が毒を、淫らな尻にそいで進ませよ!」

尻の肉悦に痺れる意識にも、思まわしい言葉は鮮烈に突き刺さった。

「お尻の中に射精される! いやあ! 絶対にいやあ! きひいいい!」

尻の奥の奥、もしくがするど腰のなかにまで侵入した亀頭が、ひときわ大きく身震いする。内臓そのものをかき混ぜられているような異界の快感が、尻から腹まで濃厚に満ちた。

ドビュッ! ジュビュア! ビュルルルルウウ!

腹の中で流れる水流の青色が、明確に聞こえた気がする。冷たい結液が吹雪となって腹の中を一気に運ばせることに、猛烈な土クスタシーが全身を吹き飛ばす。

「イクッ! イクッ! イクッ! 冷たい! 冷たい! 冷たい! お尻がイクッ! 冷たい! 冷たい! おなかグイッ! イクイクイクッ」

絶頂の叫びが途切れる前に、もつとこの黒い亀頭がコスチュームにもつ一箇所の穴を開けた。肉群に大きく広げられた肛門のすぐ上で、たつぷりと愛蜜に濡れそぼった女肉の花が開花する。

「最後の施荷じゃ。生まれ変わるための快感を存分に堪能ススススススするがよろこ」

肛門から腰の奥まで入っている生きた魔法の杖が引き抜かれる。とマイティナースは思っていた。だが射精を終えた蛇ペニスは尻の中から動こうとしない。それなのに肉群がもつ一本の魔杖に掻き分けられて、亀頭の先端が口口に押しつけられる。

自分の間違いに気づいて、悲鳴をほとばしらせた。

「だめえっ! 同時なんて絶対に無理!」

道沢権はなかつた。処女を略奪されたばかりの恥が、再び無慈悲に侵略される。ゴールマッシュに犯されたときの恐怖が体内に吹き荒ぶ。

「!」

再現された恐怖で喘がった。

だが腰内をえぐられると、恐怖が一瞬で融解して、悦楽の洪水が逆巻く。

「あっあああ! 冷たくて、濡けのう! 気持ちいいいい!」

またエンシェントホイーンの手で頭を下げられて、黒い肉群が右に左にねわって女性器の中に這い進んでいく姿を見せつけられると、快感がさらに増大した。



サンダー・クラブス：リボン マイティ・ナース

壁に潜りこむ蛇ベニスの下では、肛門に入っている肉の杖もまた蛇行している。縦に並んだ奇怪な胴体の動きは、そのままマイティ・ナースの体内につづいている。

「二本もっ！ ふあああ、二本も、あつん！ わたしの中に、オチンチが二本も入ってるっつー！」

薄い膜を挟んで、亀頭と亀頭、肉棒と肉棒が千ち千ちと摩擦し合い、新人スーパーヒーローを悩ませる。こんな悦びがあるなど想像したこともない。悪魔たちに捕まらなければ、一生知ることなかっただろう。

「最後の毒をそいでやっつー！」

拒否はできない。拒否を意識に上らせるとすらすらとすんなり。前後の肉穴の奥深くから未知の喜びを繰り返されて、もはやまことに思考することすらがわからない。

思考停止した官能の穴の中で、腰と腿の奥に冷たい魔導精液をふちまけられる。

ドジュユックッ！ ジュクッ！ 「ジュア！ グシャビルルルルルッ！」

聞いたこともない音が、存在を知らなかった音色が、機雷にも積み重なって、スーパーヒーローの体内で轟き渡る。

マイティ・ナースの首が背後に折れそうなほどにのけぞり、舌の神威の高い天井へ向けて大きく舌を開いた。

「イクッ！」

胸の内で絶叫する。

「イクイクイクッ！ アソコも、お尻も、おおおお、みんな、イッちゃうっつー——ッッッ！」

しかし声は出なかった。喉が激しく蠕動して、開いた口から白い粘液がゴボゴボとあふれ出る。人体には存在しない謎の液体が舌を乗り越えて、左右の頬を伝い流れて、コスチュームの肩から胸を濡らしていく。この異様な状態すら気持ちがよくて、新たな絶頂を重ねていく。

マイティ・ナースの口の中にエンシエント・ボイスの舌が入り込み、ペロペロと粘液を味わった。

「成功じゃ。壁んだとわりの肉体となつた。マイティ・ナーススススススススススス蛇の悦曲とともに生まれ変わった！」

蛇の魔導師の勝ち誇る声も、マイティ・ナースの耳には届かなかった。

積み重なるエクスタシーの中でまた意識を失っている。

☆

意識を失っていたのは、マイティ・ナースの感覚ではほんの三分ほど。

目を覚ますと、蛇の舌神威の硬い床に座りこんでいた。今度はコスチュームの穴が開いたままで、左右の勃起した乳房と、女性器と肛門が露出させられている。口の中には謎の白い粘液が残した白つたうい味が残っていた。

（夢じゃなかった……）

そう思わずにはいられないほど、記憶に残るものがすべてあでまじい。

全身を襲う魔気の根幹であるエンシエント・ボイスが、数メートルほど離れた床にとぐろを巻き、蛇の口の上に機嫌な笑みを形作っていた。

「マイティ・ナースススススススススス、新たな蛇の種付けをはめるのじゃ」

（種付けってどういうこと？ さっきまで……）

また思わしい交合を思い出してしまい、再び意識が遠のきかける。ギリギリでもらてきて、思考をつづけた。

「エンシエント・ボイス」がやっただことが種付けじゃないの？ え、ええ？」

「うあああつー！」

肉体の異変に声が出た。コスチュームの下腹部の穴の中の、秘密の溝がはじまるすぐ上の位置から、蛇の頭を出した。自分の体内にすでに蛇の卵があり、孵化して、腹の肉を喰い破って外へ出たのかと思った。

だがよく見れば、それは蛇ではない。

男性器だ。

肉髯の部分は、マイティナースの肌と同じ色白、きれいに剃けている亀頭部分は赤く色づいている。これまで目にした「ゴールデン・エル」の黄金の剣道とち、エンシエント・ボイズンの黒い蛇肉棒とも異なった色は、まともな人間の男性器だと思わせる。女である自分の身体から生えていなければ、もつとまともだろう。

驚いて両手をペニスへ向かって近づけるが、指が触れる前に止まった。触つてよいものか、困惑して動けない。

「どうして、わたしにこんなモノが？」

「マイティナースススススススが他の女に種付けススススススことで、その女はマイティナーススススススのオビート能力を持つ蛇の卵を孕むのじゃ」

「わたしが他の女の女の人に種付けする！ そんな馬鹿なこと」

「種付けされるのは、この女たちじゃ」

エンシエント・ボイズンの影の中から四人の女が出現した。

透明な権の中にないた女たちではない。

マイティナースがはじめて会う四人。

だが全員の名を知っている。彼女たちのチーム名も。

マイティナースは震返った声で、その名を呼んだ。

「サンダー・クラブス！」

電気を操るチームリーダーのスターサンダー。

ハイテクアーマーを身にまとうローズデバイス。

あこがれのサンダークラブスの四人は、きちんとヒーローコスチュームを身につけていた

しかしテレビで見る姿とは決定的に違うことがある。

に似せた形を成した。ローズデバイスのアーマーの頭部に王冠を載せている姿は、とても奇妙に感じる

秘儀を使わねばならなんだ

に感じられた。

のを、我々が裏にかけて挿らえたのじゃ。

もう。股間でペニスが揺れた。

理 た っ た ん だ

(6) かなづかい

に、へたりこんだままのマイティナースへ近づいてくる

マイティナースは懸命に声をかけるが、四人は反応を示さない。たまりすひとりだけの名前を呼んだ

フレア！ お悪い、そんな姿を見せないで！

る胸には、シンボルマークである黄色い炎が描いてあった

そして世界中で活躍する多数のスーパーヒーローのなかでも、フレアが最も好きだ

「フレア！ 目を覚まして！」

244

2000

$$T_{\text{eff}} = 1/\lambda_{\text{eff}} = 1/\lambda_{\text{eff}} + 1/\lambda_{\text{eff}} + 1/\lambda_{\text{eff}} + \dots$$

ね上がり、自分から肉軀をフレアの手にこすりつけてしまふこと。また新たな愉快の火花が飛び散る。

「あ、あ、あ、あ……」

のない妖しい笑みを向けてくる。マイティナースがなんとなく想像していた女ウィランの顔つきそのものだ。

「教えてあげる。よく女の快感は男の何倍とかいう噂があるけれど、ペニスをしごかれる悦びはとつてもすごいよ」

まふした音色だ。正気のフレアがこんな卑猥なことを言うわけがないとわかっている。頭にかぶせられた蛇の宝冠とやらの仕業だ

(頭の冠を取れば、サンダークラフスはまともになるかもしれない)

が弾かれた

直後にフレアの表情が変わった。淫靡な笑みが歪んで、驚きの顔になり、そして苦悩の顔つきになる。

「すまない、マイティナース。魔法で身体を操られている。なぜだか今は自分の意志で話せるが、身体は動かせない」

エンジンボイズの長い首がグニャリと曲がり、蛇の頭が横倒しになった

「これは興味深い。蛇の宝冠の支配が、部分的とはいえ勝手に削除されるとは、かつてない現象じゃ」

なにかを授けてゐるものにきかひの外へ伸びて、急速へへへへと上下した。鯨の頭がさうによじれて上下反動する

に 随 っ 立 っ 事 有 の 可

マイケル・ナースは無道謀に首を左右に振っていた。

エンシエントポイズンのモノと同じだ。自分の秘花のすぐ上から生えているベニスが、左右にくねり、空中を蛇行して、前へ這い進もうとしている。

蛇が進むには、フleaが自ら指でけるスパーヒーローの花園がある。マイティナスにもはつきりとわかった。自分につけられた男根の欲望が伝わってくる。蛇がフleaの体内を蹂躪しがついて、フleaの女根を喰らい、フleaに種付して、フleaに卵を産ませがついてくる。

（抵抗できない！）

よく男は下半身で考えて行動しているという冗談を聞くが、今の自分がまさにそうだ

（だめ！ フレアさんとそんなことをするなんて、絶対にありえない！ ダメッ！）

「早く来て、マイティナース。んんっ……うん……」

フレアが右手の人差し指と中指をそろえて、自分の腰口に挿し入れた。指の付け根まで埋めると、クチュクチュと粘つく音を奏でる。

「はああ！ 気持ちいい！ 女同士で、スーパーヒーロー同士でセックスすると、ものすごく気持ちよくなれるぞー！」

フレアの凄絶に淫らな表情と声、そして指と濡肉がこする音色が、マイティナースの感覚をなでまわす。芳醇な匂いまでもが、熱をともなうて、ねっとりともたわりついてくるようだ。

蛇ペニスの力がさらに大きくなった。蛇行が加速するにつ

スの必死の抵抗に反して

「いやっ！ だめえ！」

「そうだ、マイティナース。来い！ わたしを助け！ わたしをガンガン犯せ！」

招くフレアのほうが先に動いた。短い距離を一瞬でつめて、マイティナースに抱きついてくる。蛇が自分の巣穴を見つけて滑りこむように、亀頭が自らフレアの開いた肉花の中心に突入した。唇口を押し広げて、壁の粘膜の中で蛇行を繰り返して這い進む。

「552-」

「堅持せうせい」

同時に上がった数声のどちらを自分が言ったのか、わからなかった

マイティナースは望まぬベニスを、熱く、柔らかく、べつとりと漂

「あこがれ、スーパーヒーローとして重要な」と

気持ちよさをもっと味わいたいと願ってやまない。

「フレア！」

無意識に名前を叫び、相手の身体にしをかみついた。白地に赤い決の十字を描いた口ガッツと、白地に黄色い決を描いた豊かなバストが、押し合つて互いをたわませる。

自然と二人の唇が重なる。

（ファーストキス！）

ゴールドンシエルも、エンシェ

（これが本当のファーストキス！）

女同士など関係ない。悪党に強制され、摸られた行為だが関係ない。ただこの心地よいキスにのめりこむ

一んつ、んふ、あ

はんん はんん

フレアの舌が、マイティナースの唇を貫つた。マイティナースも舌を出して受け止める。たちまち三枚の女の舌が絡まり合つ

「んちや みちや くさなな」

一ある ちりー ちむ ぶちりニニ

君同士の夢で新選組の口の中から二丁の鉄砲に直撃位連射する時涙が流れてゐて僕の胸元からあふれ出し二丁オニール起した押し合う四つの乳房をべつとりと濡らした。

もっと激しい濡れた摩擦音が、密着する下半身から湧き起こっている。マイティナー

問に穴の開いた白いコスチュームを股間に穴の開いた白いコスチュームにぶつけつける

フレアの中で肉蛇が前後するたびに、魂そのものを絞られるような悦楽がマイティナースを襲う。あつてはならない歓喜、浸つては

ならない快感だとわかっていても、抵抗することができない。敵につけられた肉の腐物に身も心も支配されている

二人のスーパーヒーローが結ばれ、一ながこてから、数分しか経っていないが、制御できない肉欲に溺れるマイティナースは、時間

の感覚を失っていた。時間のない混沌の窟で、爆発の予感がせり上がってくる。

キスをしながら囁んでいた

「出ろぬ！ 身軽でいけニ！」「これアに出しちゃふニミニ！」

「出して！ ニーテナーの精霊を、わかしの中にはい出してええ！」

マイティナースは先述の「ロ」の口の中に、付着色素を山

「出ますっ!!」
「ワッ!」
「出ますっ!!」
「ワッ!」
「出ますっ!!」
「ワッ!」

[illegible][illegible]



フレアチオをされたときよりもさらに激しく、鈴口から粘液が噴出して、フレアの体内にあふれかえった。奔流の勢いに押されたように、フレアとマイティナースの身体が床から離れて、空中に浮かび上がる。マイティナースの飛行能力は今も封じられている。フレアが後足を連れて飛んだのだ。宝冠でコントロールしているからこそ、オブリート能力が消されていないのだ。

「あひっ！ あっおおおー！ 出るっ！ もっといっぱいほしい、フレアに出してイッちゃふふううう！」

「いいっ！ マイティナースの精子をもちとちやうだいっ！ はっあああイクッ！ わたしち精子をもらってイクククククククッッッ！」

蛇の岩神様の天井近くで抱き合い、つながり合った二人の身体がクルクルと回転した。様々な体液が飛び散り、床に降らせた。

「はっううううううううう！」

「くおおおおおおおおお！」

叫びながら二人の身体が離れる。マイティナースを抱きしめ、フレアの両手が岩の床に激突した。衝撃のほとんどはフレアの身体が吸収したが、マイティナースの身体が弾み、ペニスがすっぽ抜け、精液と粘液をまき散らす。

「ああああ……」

床に転がったマイティナースの前に、エメラルドグリーンの金属の脚線美が迫った。顔を上げると、蛇の宝冠をかぶった金属のマスクが目に入る。全身を包むアーマーの女らしい曲線を強く胸で、赤い蕾の花のレリーフが輝いているのが印象的だ。

「……ローズデバイス」

（全身を金属の装甲で覆ったローズデバイスは、どうするんだろっ。もしがして、わたしの前でアーマーを脱ぐの？）

ローズデバイスは活動するときには、常にアーマーを装着していて、生身の部分を見せたことがない。声も自然な声だが、機械で変えた声だと語っている。アーマーのスレンダーな体形から、中にいるのも魅力的な大人の女性だろうと世間では推測されていた。

見上げるマイティナースの前で、アーマーの股間部分がはずれた。サンダークラブスのチームメイトしか知らないが、ローズデバイスのアーマーは小さいパンツをブロックのように組み合わせて構成されていて、本人の意志でどの部分でも自由自在に分割して着脱できる。

これもチームメイトだけが知っていることだが、ローズデバイスはアーマー装着時には、身体に特殊な黒いインナーズーツを着ている。

だがマイティナースの目に映ったのは、剥き出しの恥丘だった。

光沢のある金属の中から色白の女の素肌が覗いている光景はアンバランスで、生々しさが強調されている。そしてマイティナースは意外なことに驚いた。

（なんだか妙な感じ……ローズデバイスの中の人は、アーマーのイメージよりも若いのもいいけど）

じつはローズデバイスはマイティナースと同年代で、特殊な生い立ちのために年齢よりも若い身体つきたとは知る由もない。

「来てください」

ローズデバイスはフレアのまねをするように、馬手のエメラルドグリーンの金属の指で秘器を左右に引っ張り、恥丘を縦に割った。

新たな蕾がアーマーの中に花開いた。胸の蕾のレリーフは鮮やかな真紅だが、下半身の蕾は淡く、みずみずしいピンク。可憐な若い蕾だ。

「かわいい！」

マイティナースは素直な感想を口に出すと同時に、股間の淫蛇に引っぱられて素早く立ち上がった。自然と両手でアーマーの肩をつかむ。

その途端、ローズデバイスの顔にはまた蛇の宝冠から、黒い電光が四方へ放たれる。

「マイティナース、ごめんなさい」

目の前のマスクから声が出た。予想もしない弱々しい声。

「コントロールから解放されたのですか」

「はい。今は言葉だけは、自分の意志で話せます。あなたをこんな酷い目にあわせて、本当にごめんなさい」
「わたしこそ、もうがまんできなくて、どうにもならないんです。許して！」

両腕でアーマーの硬くなめらかな背中を抱きしめて、下半身をローズバイスの下腹部へ押しつけた。蛇ペニスがひたひたに裏を
狙い、進む金庫の中に閉じこめられ、蛇の中心に亀頭を潜りこませる。

「あひいっ！ローズバイスの中、気持ちいいっ！」
「マイティナースのペニスにえぐられて、たまらないです！ああっん！」

マイティナースは根根を完全にローズバイスの内側へ埋没させると、腰を自分の前のマスクの口に押しつけた。すべすべしているが
硬い感触が伝わる。素顔を完全に隠した仮面にキスをして、なんの意味があるのか、自力でもわからない。ただ淫らな蛇に思われて
キスしないではいられない。

密着するマスクの向こうから、明瞭だが裏返った声がかえった。

「この姿でキスなんて、はじめてです！あつ、あつ、すつ、すこい！おまのこがすこいですう！」
フレアと通って口調が変わらないので、今のローズバイスが意識に操られているのか、いないのか、判然としない。
立つたまま腰を振り回すマイティナースの白いブーツと、ローズバイスの緑の脚部装甲が床を離れた。マイティナースには想像も
つかないハイテク装置によって、二人の身体が空中に浮かび、飛行能力が封じられたマイティナースはすり落ちないように、両腕両脚
をコアラのようにアーマーに絡ませてしがみついた。腰をくねらせつつける。

二度の射撃で、マイティナースの中に蛇男根と脳の快感中枢を結ぶ回路が完成していた。亀頭から送られてくる強烈な快楽に酔い痴
れる脳が、早くも三度目の精液放出の命令を下した。

「ああああ、また出るっ！ローズバイスの中にまた射撃しちゃおうっ！わたしじゃないのにオチンチンがイクッ！！ひ
いひい、出してイクッ！うっ！うっ！うっ！」

自身の精液にじこかれて、尿道がビリビリと焼ける。ひとまわり遅くローズバイスの腰奥を突き上げ、二人の身体はさらに空中高
く舞い上がった。

ローズバイスのアーマーの表面からホタルのような光が放たれ、四方八方へ飛散すると、ババババババツと小さな爆発を起こし
た。なにかの装置が勝手に作動したようだ。

「イクッ！マイティナースの子種をもらって、イクますっ！うっ！うっ！」

「はああああ」

「あうっ！うっ！」

二人そつと背後に尻餅をついた。壁から抜けた亀頭が、尿道に残っていた精液を搾り出し、アーマーのエメラルドグリーンの胸と
壁にふりかける。真紅の濃色のレリーフが、白く濁りだして塗りつぶされた。
「わたくしにもマイティナースの子種を授けてくださいませ」

「ボクも子種が欲しいニャン」

背後から二つの嬌声が聞こえた。

ふりかえら、スターサンダーが床に仰向けに横たわり、両脚をM字の形に開いている。チームリーダーの身体の上に、オセロット
がうつぶせで重なり、尻を潜けている。

スターサンダーはサンダークラップスの最年長で、二十代後半。電気を自在に操るオフェイト能力を持つ。

チームで最も大きな乳房をはじめとして、女らしい豊満な肉体を、赤地に青い稲妻が走るレオタード状のコスチュームで飾ってい
る。

コスチュームの中央には、稲妻型の透明な部分がある。その下までつづいた、おかげで巨乳の半分があらわになる。全裸も全開で、女性
ヒーローセシールキングの上位の常識。

これだけ肌を露出しているのに、赤いアイマスクで面目の周囲だけは隠した。

今日はいつもよりもさだに露出が多い。開いた両脚の中心でコスチュームに穴が開き、恥丘と肛門をさらけ出した。すでに肉の亀裂
は大きく開いて、厚く勃起するクリトリとぶりがりした肉裂、そしてヒクヒクと動く膣口を、自身が生じた蜜液でべったりと濡らし
ている。

オセロットはジャガーを思わせる獣人。南米の様々な動植物の精霊を召喚する魔法使い。

ヒーローネームのオセロットそのものが、中南米に棲息する猛獣の動物の名前で、ジャガーを小まめにしたような名だ。

オセロットも全身を、黄色に黒い豹紋を散らした獣毛に被われている。尻からは長いしつぽが生えていて、今もユラユラと揺れてマ
イティナースを誘惑した。

全身を長い体毛で被っているオセロットの姿は、はたしてコスチュームなのか、それとも全裸なのか、という議論がヒーローファン
の間ですつと継続している。いくらなんでもスーパヒーローが人前に全裸で現れるはずがない、という意見が主だ。

しかし今のマイティナースには、自分の目の前にオセロットが向けているものは、裸の尻としか思えない。

「ああ、ボクのエッチなことを、マイティナースのチンコで叩いてニャン」

「オセロットが語尾にニャンをつけるなんて」

ニユースで見るオセロットは乳袋をくく言うけれど、『ニヤニヤ』などニヤニヤみたいなことは言わない。

（魔法使いのオセロットが、言葉遣いが変わるほど操られてる）

これが蛇の支配に支配されている結果だとしたら、想像を絶する恐ろしい効果だ。あらためてエンシエントポイズンの魔力に驚嘆し
ながら、ふくらりと二人に近づいていく。女性スーパヒーローが重なり合って股間と尻を見せつけている。この世のことは思えな
い光景だ。

誘われるままに両手をオセロットの尻に置いた。指が柔らかな体毛に沈む。

オセロットの宝冠から黒い電撃が放たれる。しつぽがピンとまっすぐに直立して、両中の獣毛がソワソワと揺れた。

「ギャアア！なにこれ！！」

オセロットが尻を背後に向けて、猫っぽいやうな表情を表した。見開いた眼でマイティナースを凝視する。

「すこいよ！それ、いったいなんの力？」

「えっ、なんのこた、わからない。わたしにの力があるんですか」

「そんなことはどうでもいいから、早くオマの口に挿り付けてニヤニヤ」

オセロットから驚嘆の色が消えて、また卑猥な笑みをもとめた。こうなるまで化粧した顔だ。

マイティナースの前で指櫃に立っていらしたっばが凄まじく曲がり、フサフサした先端が下にいるスターサンダーの股間に入り込む。獣毛の束が勃起した陰核をツンツンにつつく。

「あんっ！」

スターサンダーのM字脚の股間がグニッと跳ね上がり、尻が床から離れた。膣口が開き、ドブツと濃厚な愛液があふれ出る。さらにしつぽが肉壁の間をサッパと牛になでまわした。まるでマシンで磨きこいているようだ。

「はあああ、いい！ オセロットのしつぽにいたずらされるのは、うっん、気持ちよくて大好きですわ、あああ、マイティナースも早くすてきなチンポで、わたくしの中にいたずらしてくださー！」

「ボクのほうが先でもいいニヤン」

マイティナースの両手が拳るオセロットの尻に、オセロット自身の両手がまわされた。マイティナースの手におセロットの手が重なり、力をこめてグイッと尻の谷間を左右に開いた。臀部を包む白い獣毛が中心部分で二つに分かれて、マイティナースの前に桜色の濡れた肉が出現する。

「見えちゃったー！」

淡い桜色の女性器は、人間の女と変わらない。フレアやローズパイプと同じで、見ているだけで心臓がドクドクと高鳴り、男根がズキズキと痛いてたまらない。

「オセロットは確！」

この衝撃の事実が世間に知られたら、大騒ぎになるだろう。そんな心配を無視して、しつぽがオセロット自身のふくらんだ女心をモフモフにする。

「ニヤン、ニヤニヤウン」

自分のしつぽに愛撫されて、尻が軽快なダンスを披露する。猫科の獣と人間が混ざり合った肉体が見せる不可思議で淫靡なダンス。ヨハ、間近に見せられているだけで、下半身の蛇が跳えたうなりを上げた。

オセロットの語る尻の下では、セクシーさで負けてはいられないとはかりに、スターサンダーの尻が大きくなっている。スターサンダーが右手の人差し指と中指を膣口に深く挿入して、グチュグチュと妖しい嬌音をかき鳴らす。

「はっあああ、うっくんん、マイティナースのたくましチンポを、わたくしのドスケベなエロ穴に欲しくてたまりませんわ」

「これも運っ！」

ニュースで見るスターサンダーはセクシーなコスチュームを着ている。言葉遣いは上品だ。

「スターサンダーはこんなことを言わない！」

マイティナースが否定して、肉蛇のほうは年上美女の品のない言葉に突っ込んだ。重なるてくる獣尻と豊胸の二つのうち、先にスターサンダーの尻を盗んだ。

肉鮮が左右にうねって、スターサンダーの開いた膣に亀頭を突き入れる。

「ほっおおうううううー！ チンポが！ 蛇チンポが、わたくしの」

スターサンダーの腰の背骨から、黒い電撃が火花を散らした。サンダークラブスのリーダーの顔がマイティナースを見つめ、告げた。

「マイティナース、今はどうしようもありません、お互いに楽しみましょう」

「スターサンダー、ああ、あまり変わらない……」

偶然としながらもマイティナースは腰を振らなくなり、蛇ベニスをスーパーヒーローの中で暴れさせる。右手は目の前でうねるオセロットの女性器に押し当て、人差し指を膣に挿入した。キュッと締めつけてくる獣の濃肉に対抗して、指先で奥の結膜を掻いて、ヌチャクチヌチャと音を弾き出す。

「ほっおおうううううー！ マイティナースの蛇チンポ、右に左にくねっていますわ！ こんなのはじめてですっ！」

「ミヤアアアア！ チンポじゃないけど、気持ちいいニヤン」

文字通り腰を振っているオセロットの口調が、無理をしているようだがええとそれれし、それは蛇の深らかな欲望だったが、今はマイティナース自身の欲望と区別がつかない。二つの華がないままになって、身体を動かしている。

マイティナースが腰を引くと、蛇ベニスが自ら肉鮮を曲げて、スターサンダーの腰から素早く後退して抜け出した。抜ける亀頭に掻き出されて、大量の愛液がドブドブと床にぶちまけられる。

「ほっひいっ！」

衝撃で浮いた美貌をさすスターサンダーを置いて、マイティナースはおセロットのモフモフ尻へ下半身をぶつけた。担わなくて勝手に亀頭が獣の中心へ突っこんでくれる。

「来たニヤン！ ボクの中に蛇チンポが来たニヤン——ンンンン」

猫尻がいつそう激しく躍動して、しつぽがマイティナースの頭や肩や胸をパシパシと叩く。マイティナースは夢中になって右手でしつぽをつかんだ。

「ニヤフッ」

手綱のようにグイと引っぱり、さらに勢いをつけて尻にぶつかっていく。

「ニユオオオオ！ チンコ、奥まで！ すこいチンコで、奥までえぐられるニヤ——ンンン」

また蛇を抜いた。オセロットの中から掻き出された愛液が自身の獣毛を濡らし、マイティナースとスターサンダーの股間に降りかかった。

「すぐさまスターサンダーの中に侵入する。」

「ほおおっ！ チンポがももつてくれましたわー！」

懸命に欲求をくぐと、また上のおセロットの奥へと叩き込む。

「ミヤッウウウー！ チンコー！ チンコたまんやいー！」

猛々しくかきまわした後、また下のチームリーダーの女肉を襲く。

次はおセロット！ 次はスターサンダー！ オセロット！ スターサンダー！

無意識のうちに、スターサンダーの中で爆発していた。

「ふあああああああ、出るうううううう……」

「チンポ汁がバドバド入ってきますっ！ あひおあっ、イクッ……」

スターサンダーの全身から青白い電光が何本もほとほとほり、岩の床や壁の表面を這いまわった。射精を継続しながら男根を抜き、精液をまき散らしながらオセロットに深く突入する。

「マイティナースがスーパーヒーローを辞めたいと思うなら、ここを脱出した後で辞めればいい。自分の人生を選択するのは自分だけだ。でも、今は辞退するな。自分が他人に食いつかれる生き方を避けるのはためだ！」

力強い言葉を発した直後、フレアの表情が支配された。瞳が欲望にきらつき、口は導き込まれ、急激な変容を見せつけられて、マイティナースの身体はフレアの言葉に反してより深くなる。

「今度はわたしの二本の肉の武器で、新人を賣いてやる」

両肩を押されて、上体を押し倒された。衝撃で大きく開いた太腿の中心に、うねる蛇の男根とそりがえる本来の肉棒が押しつけられる。膣口と肛門が同時に使い魚頭でなされ、一カ所から快感の火花がパチパチと鳴った。

「あんっ！」

火花に焼かれるマイティナースの背筋が、床の上で震える。

フレアの両手がマイティナースの腰をつかみ、腰を突き入れた。無慈悲に膣口が押し広げられ、容赦なく魚頭が侵入してくる。快感の火花が大きな炎として体内をメラメラと燃えていく。

「あひいっ！」

同時に乱舞に肛門がこじ開けられ、舐えた魚頭をえぐられる。エンシントポイズンに刻みこまれた尻の快樂の回路に電流が走り、フルパワーで歡喜の生産を開始した。

「ひおおおっ！」

腰と尻から噴き上がる歡心の波に吞みこまれ、押し流されて、マイティナースの意識が弱々しくまたいた。

「終わる」

快感と恐怖が同時に襲ってくる。

「わたしが終わる」

すべてをあきらめ、自分が自分であることすら捨てるのは、大いなる恐怖でありながら、同時に不思議な悦びになった。自分の意志がなくなり、自分の自由を失い、すべてを他者に委ねることこそ、真の平和と安楽ではないかと思ってしまう。

「フレア！ あああ、フレア……」

マイティナースは自分から、自分を犯すフレアにしがみついた。そうすればもっと早く自分を消せる気がする。

「はっあああ、フレア、フレアあああ」

「あきらめるな、マイティナース！ 絶対に自分を捨てるな！」

目の前のフレアの顔が、またもや正常なスーパーヒーローになっていた。

「必ずわたしが、んんっ！」

なおも興奮を与えようとする口を、マイティナースが唇でふさいだ。驚愕するフレアの舌を強く咬み、自分の舌をねっとり絡ませる。

「んふ、んんむ、くふあああ……」

「うっ、んん、んん、マイティナース、やめ、うっっ……」

フレアの唇は変わらなかった。困惑するスーパーヒーローの顔。追いつめられて自暴自棄になっている後輩ヒーローへの同情。自分がどうにかしなくてはならないという焦り。最悪の状況をおぼろげに察して、それを冷静に観察している悪党への怒り。スーパーヒーローらしい様々な思いを顔に出しながら、マイティナースを犯す自身の動きはますます強烈になっていく。

二本の側面に貫かれるマイティナースには、フレアの苦悶の表情が瞳に映つても、もはや認識の外だった。意識されるのは、自我の快樂を与えてくれる二本の肉の杖のみ。

エンシントポイズンが得々と結んだ男根が魔法の杖だという言葉の意味が、今こそ本意に理解できた。フレアの二本の男根で貫かれて、猛烈な快感とともに、自分の身体が学校の化学実験の薬品のように、バラバラに壊滅されていると感じた。体内の内蔵も、骨も、筋肉も、ドロドロに溶けて、グルグルと巻き回られて、融合して、新たな物質になろうとしている。

「はんっ、うううあああ、終わる、終わる、わたしは終わって、別のものになる……ふっああああ……」

害虫が蛹の中で一度液体になり、再び凝固して、似ても似つかない蝶の身体になるように、自分の身体が別のものに創り替えられていく。

「気持ちいい！ ああああ、気持ちいい！ みんな終わって、創り替えられるのが気持ちいいよう！」

蛇の母にされた女たちが、どうして種や子宮ごとにかかっている中にも入りきれない量の卵を産めたのか、今ははっきりとわかる。肉体を改造されたのだ。腹の中に別の空間を築かれている。

オフビートの能力のエキスから卵を作る真空間。それが女たちの、そして今は自分の腹の中に建造される。子蛇が創造され、卵の殻に包まれて、やがて腹を通って外の世界へ生まれるのだ。

「わたしは……ああああ、わたしは、卵を産む機械にされる。はっううう、ああああ、蛇をたくさんたくさん産卵する、あひい、生きた機械になるのっ！」

「だめだ、マイティナース、ああああ、くっくくくくくくくくく……」

フレアが長々と絶叫して、ひときり強く、高く、深く、二本の男根が突き入れられた。腹と腸の間でひとつになった魔法の空間で、同時に二つの魚頭が大噴火する。女の体内の真空間へと、膨大な精液がまき散らされた。

「イクッ……」

マイティナースはひと言だけしか、エクスタシーの声を発せない。未知の衝撃が喉をつまらせ、言葉も呼吸も奪われた。背中から床に倒れ、ハイフ機能で作動したスマートフォンのように力強く運搬する。

外からは苦しんでいると見えるが、マイティナースはめくるめく絶頂の大笑の中をたゆたっていた。のたうつ女体の中で、飛散する精子が自分を形作る何かと融合して、新たなものに結実するのを感じる。

「産むのじゃー！ マイティナーススススススの卵を産んで見せー！」

常に冷徹な態度を示していた魔道師が、がまんできないように上ずった叫びを放つのが聞こえた。

マイティナースはヒュ——と大きく喉を鳴らして空気を呑み、無意識に手足に力をこめた。自然と身体が床から持ち上がり、全裸の女たちやサンダークラブスが見てつけたM字開脚の産卵ポーズになった。

「はっっっ！」

今日彼女を失ったばかりだが、セックスとはまったく異なるはじめての感動が湧き起こり、持ち上げた股間が激しく上下します。腰の奥に、突然異物が出現した。つまりさっき作られた体内の真空間から、蛇の奥の部分に卵が移送されたのだ。外から奥へ向かって様々な男根を挿入されるだけだった腹の中を、球形のものが奥から膣口へ向かって進んでいく。

通常と反対の方向へ腰がこすられ、強く摩擦する。一ミリの前進が、目もくらむ気持ちよさを生み出す。卵がまた産み出された。口から何度も卵が噴出した。

「ひい、イクー。産む前からイクてっとうっ!!!」

大きく開いた口から涎を垂らして、さらに激しくM字に広げた股間をセクシーにダンスさせる。高く跳ね上げた女性器から飛び散った花蜜が、何度も自分の胸を濡らし、白いコスチュームを透けさせる。

ついに秘孔が内刺から強烈に押されて、限界を超えて広がった。他人の産卵を自撃したときには、おそろしく痛そうに思えたが、苦痛はなにもない。ギチギチと強引に広げられることが夢のように心地よい。

「産まれるうっとうっ!!! うっとうっ!!!」

大量の水溜とともに、白い卵が空中を舞い、クルクルと床に落ちた。

一個では足りない。一個だけでは満足できない。投球間隔を間違えたバティングマシンのごとく、マイティナスの大きく開きっぱなしの産卵用の産穴が、二個、三個、四個、五個と連続して卵を発射する。



「きひい、イクッ! 産まれる! イッちゃう! 産まれちゃう! 産まれたあ! 産む産む産むんん! イクイクイクイクッ
ふうふうんんんんんんんんん!!!」

一個飛ばすたびに、大きく屹立したクリトリスがビクビクと蠕動して、絶頂が爆発する。下では肛門が開閉をくりかえし、腸液をビュビュルツと断続的に飛ばす。絶頂に絶頂が重なり、止めどなく高まりながら、合計十回の産卵エクスタシーを極めつくした。

「はあああああうっとうっ!!!」

全身から力が失われて、背中と尻を床にぶつけたマイティナスの視界に、自分がこの世界に導き出した十個の卵が転がっている。

「あああああ。わたしの卵ああ」

「これでいい……これでいいの……わたしは産む産むの機械になつたんだから……」

ぼんやりと見つめる前で、すべての卵が同時に割れた。小さな子蛇がいつせいに姿を現して元気に這いまわると、自分が産んだから、とてもかわいく見える。

「これは……」

ひっくり返った声を立て、子蛇たちの中に黒い大きな蛇体が滑りこんできた。エンシエントボイズンの腕の両手がかみ上げた子蛇の群れは、どれも頭から尻尾の先まで真紅に輝いている。黒い鱗は一枚もない。

「何故じゃ。何故、赤い!」

舌を伸ばして、子蛇たちの鱗を次々とペロペロ舐めまわす。

「なんぐー。そうじゃ。そうじゃったか! 間違いない! なんというこたー!」

右手を床に伸びる自分の影につつま、影の中から蛇の舌を取り出し、マイティナスの頭に被せた。途端にマイティナスの顔から表情が消えた。下手くそな仮面のような無表情で、人形として床に横たわる。

「えっ!? わたし?」

「これが蛇の舌を噛みはめられるというこたの! なんでもできない!」

産卵用機械になつたことをよしとしても、生きたまま人形にされるとは思わなかった。監視と化した自身の肉体の中で困惑するマイティナスの胸を、エンシエントボイズンの手がつかむ。

「ジェントルマン・レックスステススス、ゴルデンシェル、今ススススススすぐわれの神殿に来てくれ。極めて重要な一大事じや」

それまでの岩壁と同じに見えていた部分が横にスライドして、黒いシルクハットを大きな頭に載せたティラノサウルス人間と、黄金色の燦めく大亀が神殿に入ってきた。二人の後ろには、統一した制服の構成員たちが何人も隊列を組んでついてきている。

「まず訂正しよう。われは魔道をめんがため自ら肉を蛇に変えたと言っているが、それは嘘だよ。われは生まれながらにこのスナクスナクス姿である」

「まう。ではエンシエントパイザン君はミュータントか
ジェントルマン・レックスが面白そうに首をかしげた。

にいたところに親しくした一族の赤ちゃんも、先祖からの人狼の呪いを受け継いで、狼として生まれてきたよ」

「そもそもわれは猿から進化した人間ではない。人間の先祖がまだ木から下りる前に、魔道による文明を築いた偉大な種族なり。我が種族の名は人間には発音できぬ。人間のなかで古代の叢書の断片をかじった者たちは、我が種族をウァル・シアの蛇人間と呼んだ」

「ほう。興味深い。人類誕生の前に存在したというヴァル・シアの蛇人間のごとは、僕も名前だけは聞いたことがあるね。僕はエーシ

「われはレプティルホールを辞ススススススススする。今までジェントルマン・レックススススススの財産で、我が魔道の探究に協力し、

てくれたことは感謝しよう。じゃがマイティナースススススを我が奴隷にしたからには、もはや他人の助力は必要ない」

ユミ：「イントロの音楽を、マレーシアに誘ったことになったから、その中で慣れているさ。今はまだ不慣れな（えっ、どういこと？ わたしがなんだというの？）」

「覚醒せよ、我が奴隷。忘却していた真実に身をまかせるのじや」
 「えええ、なんのことなの!? えつ、えつ、ああつ!? うあああああつ!」

マイティナースの身体が爆発した。全身を構成する物質がすべて赤い炎に変化して、大きく広がった。

そして巨大化した炎はまた物質化して、新たな姿を顕現させた。
真紅のドラゴン。

四本の脚を持つ胴体は、アフリカゾウをひとまわりも大きくしたほどもある。長い首の先に優美だが恐ろしいほどの頭がある。頭からは

二本の炎の形をした角が高くそびえた。尾も長く、先端には炎の形の棘がいくつも生えている。そして背中には二枚の、コウモリに似た大きな翼。

全身がルビーのように赤い光沢のある鱗に飾られて、周囲に炎をイメージさせる煙めきを投げかける。

美しく幻想的、それについて畏怖をかきたてる圧力的な迫力があつた。大きなドラゴンが収まるにはかなり窮屈だった。翼と尾を縮こまらせている印象の赤いドラゴンの前で、エンシェン

トボイスンが傲慢に瘦せた胸を張る。

落ちてきて孵化した子供なのじゃ。身を護るために、本能で人間の赤ん坊に擬態して、自分の真実を忘れたまま今日まで生きてきたに

「さすがのジェントルマン・レックスも、ゴールデンシエルも、想像を絶する話に感然としていた。ジェントルマン・レックスは科学

の力で身体をティラノサウルスほど改造した金持ちの放蕩息子。ゴールデンスピエルはソ連軍の実験で宇宙の金属と融合した死刑囚。と

そしてちっとと唸然とすることが起きた。エンシントボイズンの背後のドラゴンの頭の、人間でいえば顔にあたる部分の鱗が赤い光

を放った。頭にちよこんと集つていた蛇の宝冠が粉々に碎け散る。

「このトビゴの廣ナを採るに、われはこの地球で最古無間の」と、自己陶醉した熱弁をふるうエンシエントボイズンの蛇の頭と人間的な上半身が、背後から伸びたドラゴンの口に啜えられた。

「(わい)う」

超古代の巨人を口に入れたまま、ドラゴンが人間の言葉を発した。姿形とそぐわない若い女の面。マイティナリスの面そのままだ。

だ。

「思い出した！ 全部思い出した！ わたしはオビートとか、ミュータントとか、そんなものじゃない。人間ですらない！ わたしはトラゴンなんだ！」

美しき威容にはまったくふさわしくない哀しい声が、神殿に反響した。

シュントルマン・レックスはなげなげしい声でドラゴンに託を持ちかける。その空愛を誘む一毛りのない度胸だけはさすがにな

「きみのそのゴーシャスに騎が建くドラゴンの姿も、すてきな爬虫類といえる。どうだい。レプティルホールに加わらないか」

ドラゴンが首をひと振りすると、エリシエントボイスンの身体が岩壁に叩きつけられて、床に転がった。生気が根こそぎ抜けたよう

に呆けた顔で、全身がふやけた麵のごとくのびて動かない。
「あなたたちを絶対に許さない！」

「面白れ王」

ゴールマンシエルの金の身体が空手に浮かび上がり、甲羅の先端を巨大な槍ごとく鋭くとがらせて、ドラゴンの胴体目がけて突っ込んでいく。

ドラゴンが大きく口を開き、紅蓮の業火を吐いた。まっすぐ横に伸びた炎の柱は、空飛ぶゴールデンシルの全身を包む。

「俺のゴキウアヘニ、トカシなんか、なんもトシ！」
高圧洗浄機の強烈な水流で頑固な汚れが剥がれていくように、金色の宇宙金属がドロドロに溶けて、炎に飛ばされた。後に残った全

裸の不健康そうな中年男が、ドスンと床に落下して気絶する。だらしのない裸体が大の字を記した。「すべての属成員の注意！」

ジェントルマン・レックスが全速力でダッシュして、神殿の外に出て叫んだ。

「武器を持って神殿に集まり、ドラゴンを倒せ！ 参加者全員に特別ボーナスを進呈するぞ！」

神殿にもとからいた構成員たちに、新たに駆つけた者たちが加わり、腰のベルトからサブマシンガンを取り出し、ドラゴンに向けて撃

つた。すべての弾丸が真紅の髪に当たり、かすり傷ひとつもつけられずに、巻のごとく床に落ちる。

ドラゴンの炎が竜巻のように渦巻き、神殿の内部全体が炎に埋まった。一方の壁にそびえる九頭の太蛇の石像が溶けて崩れた。壁面

も塗料が蒸発して、すべて消失した。薬炎はさらに神殿の外まで広がっていく。自投を聞くと炎が消えると、萬成貞と手がこじり三途河がすべて燃えつきて、赤影がふつていた。

[illegible]

しかし構成員たちは生きている。手に持っていたサブマシンガンは焼失したのに、おそろいの制服は焦げてすらいらない。ただ全員が意識を失って折り重なって倒れていた。

失神して床に横たわるエシエントボイسنとコールデンシエルも無事だ。蛇人間の鱗一枚、元死出の短く刈った髪の本一本たりとも焼けていない。

激怒しているも、人を傷つけたくないという思いが、ドラゴンの魔力の炎に燃やすものを遠ざけた。人間には精神に魔力で衝撃を与えて、気絶させるだけにした。もし殺意があったなら、全員がひとかけらの骨も残さずに蒸発していたろう。

「はああああ……」

炎ではなく長い長い息を、ドラゴンが吐いた。直後に巨体が赤い炎に変わり、小さく収束していく。

炎が再び物質化する。マイティナースが床に居るのみ、もう一度大きな息をついた。

「わたしは人間じゃなかった。全然知らなかったドラゴンのいろんな知識が、護の中にぐんぐんあふれてきて」チャコチャ。ドラゴンなんて、どうしたらいいの？「これから、なにをすればいいの？」

「はああああ……」

顔を上げる。「命令書がいなくなってるつくしたままのサンダークラブスの四人の護で蛇の宝冠が燃えつきた灰になって粉々に砕けた。

四人の護に本来の表情がもどり、マイティナースへ向かって駆け寄ってくる。

「そつだ。少なくとも、今、わたしにはすることがある」

マイティナースは無理に微笑んで立ち上がり、これからスーパーヒーローがするべきことを四人より先に言った。

「監禁されている人たちを解放しましょう」

マイティナースは同時に「二階堂正敏」と「二階堂真美」の科学者夫婦を抱えて、空を飛んだ。
「二階堂降史の母親は、レフティルホルの墓地の庭室に監禁されていた。蛇を産卵する女たちとは違い、夫婦が閉じこめられていたのはホテルの客室で通用する部屋だった。
マイティナースとサンダークラップスはエンシエントボイスンの魔法の支配から解放されると、墓地の中を捜索して、構成員たちを捕縛し、大勢の女性を発見した。」

サンダークラップスが簡単に通報し、女性たちが受けた邪悪な魔法による障害の検査のために、ジャスティスサーカスに連絡した。日本最高のヒーローチームであるジャスティスサーカス本部には、魔法治療の専門設備がある。
しかしエンジェルマン・レックスを発見できなかった。

構成員の誰も存在を知らなかったが、基地を捨て、部下を捨て、ひとりて逃したのだ。
マイティナースは自分が事件に関わっていることは思わないうでほしい、とサンダークラップスに頼んだ。犯罪者やスパーウィッチと闘うスパーヒーローだと人々に思われなくなかった。そんな覚悟はまだできていない。

基地の中で、マイティナースとフレアとスターサンダーのコスチュームの複製を発見した。おかげで脱出丸出しの格好でうつづかなくてすんだ。ローズデバイスだけは自分でアーマールの脱出をたやすく修復した。
マイティナースは、フレアたちに事情を話し、「二階堂夫妻を連れ出した。スマホで降史に連絡すると、両親がある地点に連れてきてほしいと言われた。そこは別れ際に決めた市内の格安ホテルではなかった。
(住衣に、降史をホテルに連れていき、身を潜めているように約束したはずなのに、うしてこんな場所にいるんだろう?)

マイティナースと「二階堂夫妻が降りたのは、レフティルホルの墓地がある山岳地帯の山々のひこうにボツンとある別荘。玄関の前で、降史と住衣が並んで、ゆっくりと降下してくる二人に向かって手を振っている。
自分を見上げる降史の顔を見ると、胸がキュンとした。レフティルホルの悪党たちから受けた異常で非道きわまりない陵辱も、すべて遠いところへ消えてしまう気がする。
そうか、そうだったんだ。

レスキューに緊急して、犯罪者の相手をしない、という自分たちが決めたルールをあつさりと破った理由が、今納得できた。
(わたし、降史さんにひと目で恋に落ちたんだ!)
今までオビートであることを隠していたために、恋愛に慎重だった。ラブストーリーでよくある誰かをひと目見て好きになることなんて、信じられなかった。それが、今、自分に起きている! 降史の鼓動はまさに、自分は恋にしている、とはっきりと自覚する。
(でも、わたしがドラゴンだと知ったら、降史さんはなんと言ったさう。どうやってドラゴンだと告白すればいい? でも降史さんなら、きつと受け入れてくれるはず)

マイティナースは大きな希望を抱いて、降史の前に両親を下ろした。
感動の再会! 熱いハグ! 家族の涙!
と、マイティナースは期待した。だが降史が口にしたのは。
「二人とも無事でよかった。
父親は冷静すぎる態度で会えた。
「助かったよ。礼を言え」
母親は無言とくに反応はない。
(ええっ! 科学者一家だから冷静なのかな?)
住衣も驚きの顔で、「二階堂」家を見つめている。だがマイティナースは見違えなかった。親友の瞳に輝く光を。
(住衣も、降史さんに恋してる! 友達がライバルになっちゃう! ああ、どうしよう、きっと住衣のほうが恋愛の経験豊富だから、駆け引きで負けちゃうかも! でも負けたくない!)
心で叫ぶのだ。

「朝田弘樹!」
踵上から知らない人の名前を呼ぶ大声が降ってきた。
その途端、降史の顔が変化した。
顔の造形が変わったわけではない。髪型も、目も、鼻も、口も、なにも変わっていないのに、一瞬前まで胸いっぱい感じていた優めきもトキメキもなくなつた。ごくごく平凡な、言葉で指摘できそうな特徴のない、大学の教室や校庭ですれ違つた勢の学生と変わらない存在になった。まるで知らないうちに目の前にあった十才キヲするフィルターが取り払われたようだ。
「どうして?」
「なんで?」
マイティナースだけでなく、住衣も同じ口調で声を上げる。
降史本人は怒りで顔を赤く染めて、空を仰いだ。
空からフレアとローズデバイスが降りてくる。エメラルドグリーンのアーマールの腕から五百円玉サイズの小さなディスクが射出され、二階堂夫妻二人の肩に当たった。ディスクから細いテープが何本も飛び出し、一瞬で親子の全身を覆り上げて動けなくした。
マイティナースの前に横たったフレアが語る。

「マイティナース、黙っててすまない。二階堂夫妻と名乗っている一人は、ヨーロッパの犯罪組織「秘密の同盟」に所属する科学者だ。ローズデバイスの顔認証システムが反応してわかった。だから二階堂降史という男もなにかがあると思って、こっそりと追跡してきた」
「お、それはいいけど、降史さんはいつかい」
「こいつの本名は朝田弘樹。警察やヒーローの間では『空つぽの王子』と呼ばれている」
「違う! 俺のスーパーバイランネームは『魅惑の王子』だっ!」
身動きしないエンファイプリンスが叫ぶが、フレアは黙殺した。
「こいつは初面の女性に、自分に恋をさせて、思い通りにさせるソフト犯罪者なんだ。一種のテレビシーによるマインドコントロールだ。女性か幼児でも、老人でも、同性愛者でも恣にせられる。でもこいつの精神的な理由らしいが、恋をしている女性の前で抑

田弘樹と本を呼ばれる。能力の影響を失う。それでマイティナースも友人も解放されたんだ」

フレアは、エンティプリンスの胸もとをつかみ、厳しく怒鳴った。

「これはどういう計画だ」

「俺はシークレットカバルに雇われただけだ。日本に帰国した組織の科学者が、ジェントルマン・レックスに捕まったから、助け出してこれってな」

「よし。後はいっしょに警察へ行つて聞いてやる」

「待って」

マイティナースが金切りの声をほとぼしらせる。

「全部嘘なの！ わたしがしたことは全部嘘で、全部心を操られていただけ！」

フレアがエンティプリンスを地面に放り出し、マイティナースの面屑をつかんだ。

「違う！ 理由は嘘でも、マイティナースがいなければ、レプティルホールに監禁されていた女性たちは救助できなかった。サンダークラブも奴隷のままだった」

ローズデバイスも優しく語りかける。

「つらい経緯だったと思います。でもマイティナースは」

マイティナースの背中から腫瘍が広がった。フレアの手を振りほどき、ロケットのまうに青空へと垂直に飛翔する。

空中高くで、紅蓮の炎が大きく広がり、真紅のドラゴンが現出した。

赤く輝く翼を大きく羽ばたき、ドラゴンはさらに高空へと上昇して、すぐにフレアの間を照える視力でも、ローズデバイスのアーマーのレーザーでも、追えなくなった。

このときはじめて親友がドラゴンだと知った住人は、ただ青空へ向かつて叫んだ。

「流奈！ 帰ってきて！」

十日後 午後五時過ぎ

流奈は手に持ったタンポール箱をマンションの廊下の床に置く。自分の水色のワンピースとスニーカーがおかしくないか、確かめた。高校生のころに着ていた服だから、少々子供っぽいのは仕方ない。スニーカーに少し短った土がついている意味もわかってくれるだろう。

ドアの脇にあるインターホンのボタンを押して話しかけた。

「わたし、帰ってきたから」

蜂 蜂を引寄せたらんばかりの勢いでドアが開き、目の前に見慣れた白いTシャツとレモンイエローのショートパンツの佳衣が現れた。

「あ、

流奈がまた口を開く前に、佳衣が叫んだ。

「流奈っ！」

佳衣がタックルするように親友に抱きついてきた。渾身の力がちかみしたが、流奈の身体はくちくちしないで、優しく受け止める。

佳衣の顔目から、はらはらと涙をあふれた。心配したという言葉はない。しかし流奈は、佳衣が人前で涙を見せるのはあまり格好しくないと思っっていることを、よく知っている。佳衣が自分のために泣いていることがうれしい。

流奈も親友を抱きしめ、安心させようと思いいしやを出した。

「めいね、もっと早く佳衣に会うつもりだったけど、先にお父さんとお母さんに会って話したら、長々と引き止められて、マンションにもどるのが遅くなっちゃった」

「うんうん、やっぱり親と話すのは大事だよ」

佳衣が涙声でつぶやく。濡れたシヤウシヤの顔を上げて、流奈を見つめる。

流奈は佳衣の腕の中からするりと身体を抜くと、足もとに置いたタンポール箱を持ち上げて、親友へ差し出した。

「はい。わが家からのみやげ。いつも通りのうちの農場で取れた新鮮野菜ね」

「ありがと、おじさん、おばさん、またまたこそそうになります」

佳衣も両手を野菜入りの箱の底にまわすと、後ろ向きに歩いて玄関からキッチンに入った。流奈も佳衣と向かい合っていっしょに箱を選び、勝手に知った親友のキッチンにすんすん入る。

佳衣と流奈はタンポール箱をキッチンの床に置く。箱を挟んで床に膝をつき、カムテープを剥がした。中につまんだトマトやキュウリやニンジンも、二人でひよいひよいと冷蔵庫の野菜専用室へ取めながら話しか合う。

「あ、十日も入行ったの？」

「わたしはドラゴンなのは聞いた」

「サンダークラブスから聞いたよ、すごいよ！ サンダークラブスの普通の電話番とメールアドレスを教えてもらっちゃった！

流奈が帰ってきたら、流奈にも教えてやれって」

「すごい！ すぐにお礼を言わない」

「まあ、それは置いて、ドラゴンに変身したら十日も入行ったの？」

「乾期に蘇られた記憶をたどってたから、自然とドラゴンの世界へ行っちゃった。別の惑星とか、異次元とか、そんなのじゃないんだよ。この地球と重なってると微妙にすり抜ける場所という感覚。ああ、言葉では上手く説明できない。とにかくそんな感じね。そこには不死のドラゴンたちがたくさんいて、もう、笑っちゃくらくらいういっているんだから」

「見たいなあ、その光景、日本画に描かれているみたいな超長い龍もいるの？」

「西洋のドラゴンと東洋の龍は種族違って、龍にはまた別の世界があるらしいよ。その世界にいるドラゴンたちは不死だから、みんな大賢者という眷属になった」

「そのドラゴンのなかで、流奈の親もいた？」

「ドラゴンたちに聞いてみたけど、わからなかったよ。ドラゴンたちは血縁関係を全然気にしていないし、家族がいっしょに住むことではないみたい。ドラゴンたちという話しかけて、わたしは人間として育ったのだから、人間として生きればいい、とみんなから言われた。わたしだけではなくて、人間として生活しているドラゴンが何人かいるそうよ。たとえば……」

流奈の口から出た世界的女性ポップスターの金髪を聞いて、佳衣がカクッと大口を開けたままだ。佳衣もスファンなのだ。

「ええええええええええええ！ 信じられないような、納得できちゃうような……はあああああ」

キッチンから見える居間の壁のポスターに目を向け、佳衣は大きく息をついた。佳衣のリアクションを見て、流奈は伝えた甲斐があったと満足する。

「人間社会のドラゴンたちの話を聞いて、すっきりしちゃった。わざわざ悩むことなんてないんだって。先のごとはわからないけど、今は佳衣といっしょに、ただのオポर्टとして生きていきたい」

「ありがと、すっぴんおれこ」

「わたしもありがと」

野菜をすべて冷蔵庫に収め終わると、流奈は立ち上がった。キッチンの中で、自然と緊張する姿勢になる。

「たにかこれからの予定としては、マイティナイスというヒーローらしく、救急救命士の資格を取ろうと思ってる。もちろん大学の文学の勉強はつづけるから」

佳衣は顔をニッとほころばせた。

「マイティナイスについては、わたしもいろいろアイデアがあるんだ！ きつと世間の皆様も驚くよー」

「いいね」

二人して笑い合っていると、流奈のワンピースのポケットでスマホが鳴った。マイティナイスの出勤申請専用のほうだ。

「はい、マイティナイスです」

スマホの向こうから、聞き慣れた黒髪本部の招集者の声が響く。

「よかった！ マイティナイス、帰ってきてくれたんだ。きみのサポーターのエイドと称する人から、きみが個人的な理由で国外へ出ていると連絡があったから、心配していた」

「すみません、今日からまた手伝わせてください」

「感謝する。今、地下の工事現場で事故が起きている。マイティナイスの助けが必要だ」

流奈が事故の状況を聞き終えたときには、佳衣がクローゼットから新しいマイティナースのマスクとナースキャップを「スチュームを出していた」
「救助が終わったら、新鮮野菜でマイティナースの再始動記念パーティーね」
「知らないものは、後でいつかにも買おう」
流奈はマイティナースの愛になる。背中から腫瘍の翼をひき、人目がないのを確認して、マンションの裏からまた明るい夕方の空へと飛翔した。
佳衣もザックを背負い、愛車のバイクでマンションの駐車場を出て、親友の後を追って走った。